カラスの死体

yz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カラスの死体

【Ｎコード】
Ｎ９８００Ｘ

【作者名】
ｙｚ

【あらすじ】
俺は友人とカラスの死体を模写する。

カラスの死体

結局、カラスの死体を模写することになった。

飛んでいるカラスは見慣れている。
朝、学校へ行く途中のゴミステーションで何か食べ物はないかと群がっていたり、夕方に電線に止まり並んでこちらを興味なさそうに見下ろしていたりした。
その真っ黒な鳥は俺にとって風景の一部だった。

それをこうやって完璧に死んで硬直しているカラスをスケッチブックに模写している。
黒い羽毛、黒いくちばし、黒い瞳、どこまでも黒い身体……俺の人生でこんなにもカラスを真剣に見たことがあっただろうか？今まで見ているようで見ていなかったカラス。その全てが新鮮だった。

小雨がぱらついてきたので一緒に模写していた三雲に声をかけようとした。しかし声をかけることができなかった。
三雲はカラスを模写しながら笑みを浮かべていた。
それは気味の悪い笑みではない。子供の微笑みに近かった。
カラスの死体を模写するにふさわしくない笑み。

○

俺の通っている高校はどこにでもある普通の高校だ。
甲子園を目指すほどの野球部も、東大を目指すほどの頭脳もない。
みんな揃ってどんぐりの背比べ、背の高いヤツは足を引っ張られ、低いヤツは死なない程度に軽く踏みつけられる。夢を語るヤツは多

いが、熱く語るほど情熱はなく、へらっと笑って冗談交じりに口に出して人に話せばそれで満足。

そんなごく普通の連中が通う、ごく普通の高校。
その普通の高校で普通ではない全国上位レベルの実力をもっている部活がある。
我が美術部だ。
色々なコンクールに出展して、そのほとんどで賞をもらっていた。
夢なんて口に出さない。ただうまく描ければそれでよし。
背は高ければ高いほど良い、低いヤツは容赦なく潰されるべきだ。
夢を語るより黙って白い紙を美しく埋めろ。以上。

そんな普通の高校で普通でない美術部の部員十二名……のはずなのだが、いつも決まって部活で見かけるのは同級生の三雲文貴、ただ一人。
俺と三雲、二人でこの美術部は成り立っていた。
少数過ぎるかもしれないがヘタなヤツが集まってやいのやいのと、賑やかにやっている部活動なのか、お絵かき倶楽部なのか分からないものよりマシだろう。
美術部十二名から選び抜かれた少数精鋭とでも言えばカッコはつくか？
しかし、精鋭部隊は無駄がないのが利点でもあり、欠点でもある。
人物画の練習をしようにもモデルがいない。

「あのさ、三雲、おまえがモデルやれよ」
「はぁ？前のコンクールさ、雨宮が優秀賞でボクが佳作だっただろ？この美術部全体のレベルアップを考えて雨宮がモデルやってよ。いいからいいから、脱がなくて」
ちなみに三雲が言った雨宮が俺の苗字だ。
「雨宮真司」これが俺の名前。

「脱がねぇーよ。モデルもお前がやれよ。部長命令」
「うわ、酷ぇ、副部長あっての部長だろ？つか、二人しかいない美術部なんだからさ。部全体の技術レベルの向上を考えるのが部長じゃね？ほら！もうやるしかないって」
いつもの不毛な会話。こうなってはお互い絶対に譲らない。
同じ高校の同じ部活の同級生だとしても、一番身近なライバルだ。
俺はケータイを取り出しアドレス帳を開いてすぐつかまりそうなヤツにかけた。

「誰かアテあるのかよ？」
「まぁな」
「誰よ？」
「宮坂香奈」
「アイツさ、バスケ部じゃなかった？」
「辞めたんだよ」と言おうとした時にケータイに香奈が出た。
「よう俺、今ヒマ？」
『うん、ヒマって言えばヒマだけど』
「今から美術室来ないか？モデルやってほしいんだけどさ。いいかな？」
『なんかくれる？』
「絵やるよ」
『雨宮の絵かぁ、あんま興味ないな』
「失礼なヤツだな。これでも俺、前のコンクールで最優秀賞だぜ？高校生で一番ってことだ。言ってみれば甲子園で優勝したと同じこと。その俺の絵をやろうっていうんだ。ありがたく思えよ」
『思えないよ。興味ないし。でもまぁいいや、待ってて、すぐ行くから』そう言ってケータイは切れた。
「へぇ、スゲーじゃん。宮坂とデキてたなんてなぁ。プライベートでヌードとか描かせてくれるん？」
「違うよ。つき合ってるワケじゃねぇし。ただアイツさ。バスケ部、

辞めて美術部は入りたいって言ってきたからさ」
「へぇ、じゃあ入れれば」
「でもアイツさ。致命的に下手なんだよ、絵」
「じゃあ、ダメだな。バスケやってりゃいいのになぁ」
「アイツ、アキレス腱切ってバスケ部やめたんだよ。一時期、松葉杖ついていたから分かるだろ？」
「うーん、宮坂のやつに興味ないから見てないや。どうしてアキレス腱なんて切ったん？」
「部活で必要以上に頑張って疲労が溜まってアキレス腱が切れたみたいでさ。ホラ、一応、ウチのバスケ部さ。県大会までいっただろ？そんでアイツがエースだったしさ。必要以上に頑張ったんじゃね。怪我しちゃ元も子もないんだろうけどさ」
「ふうん」三雲は興味も無さ気に相槌を打った。
そして「運動部だろ？筋肉とかいいもん持ってんじゃね？マジでヌードになってもらうぜ」と宮坂がアキレス腱を切ったことについてまるで興味がないように冗談交じりに笑って言いながら、教室の真ん中の机をぶっきらぼうにどけた。そしてそこに椅子を置いて、窓のカーテンを調節しながら、どういった絵を描くか思案している様子だった。

いつも思う。人なんてどうせ自分の事しか考えてないのだ。それは分かる。
俺もそうだ。けれど三雲は特にそうだった。県議会議員や大企業の重役ともつき合いのある銀行の社長の息子という俺からみたら上流階級の人間ということもあるだろうが、こいつは何か違うのだ。うまく言い表せないが。そんな時、がらがらと美術室のドアを空け、宮坂が恐る恐る顔を覗かせた。

「雨宮いる？」
「そんな恐る恐る入ってくることねぇじゃん」

「だって静まり返ってるし、不気味じゃん」
「美術部は静かなもんだろ？」
「そうそう、ダムダムダム……ってゴムボールを床に叩きつけ、クソうるさくて汗臭い体育館より知的だろ？」
三雲は言い捨てながら「どうぞ」とレストランのウェイターのように無駄なく洗練された動作で教室の真ん中に配置した椅子に宮坂を案内した。
三雲は普段の話し方やこういう時の動作は惚れ惚れとする。
何か訓練を受けたわけでもないのに自然に優雅に振舞えた。
やはり金持ちは何か違うのだろうかと疑わずにはいられない。
もっとも金持ちはこいつしか知らないわけだから比べようはないが。

「で、どうすればいいの？」
宮坂が言った。
「脱いで」
さっきの上品さを漂わせたままの笑顔で三雲が言う。
「いやだよ」三雲の返答に宮坂は間髪要れず反論して少し不安そうに俺の方を見た。
「コイツの言うことは気にしなくていから、そのまま動かずにいてくれればいい」
「できれば息もしない方がいい」と三雲が混ぜ返すが宮坂は三雲を無視することに決めたらしい。懸命な判断だと思う。そして三雲と俺とで模写し始めた。
しかし何分も経たないうちに「ねぇ、なんかそんなに見られると恥ずかしいんだけど……それにここ何か変な薬品臭くない？」と宮坂は言い出した。
確かに美術室全体に油絵の絵の具の臭いがついていた。
慣れている俺たちは平気だが慣れてない宮坂には不快かもしれない。
俺は窓を開けようと立ち上がろうとした。
しかし、俺が立ち上がる前に三雲が「黙れ。動くな」と不機嫌そう

に吐き捨てた。
三雲の反応に思わずびくっと宮坂は驚く。
「外にしない？」と、俺にすがりつくような目で言う。
「なぁ、三雲、外に出よう」
俺は三雲に言った。せっかく得たモデルに逃げられるもの嫌だ。
三雲は俺の言葉に無表情に頷いた。
そしてスケッチブックに描いた宮坂の絵に大きく罰点をいれた。

○

外に出ると宮坂は校庭で「どういうポーズをとろうか」と鳥かごから開放された小鳥のようにはしゃいでいた。良く笑う子だ。アキレス腱を切った時は一時ふさぎ込んでいたが、今ではそんなこと忘れたかのようだった。
「どうでもいいから早くしろ」俺にしか聞こえないように三雲が言う。
「じゃあ適当に立っていてくれよ」と俺は宮坂に頼む。
そして小声で「逃げられたらどうするんだよ。合わせてくれよ」と言ったが、三雲は俺の言葉を無視して芝生の上に座ってスケッチブックを広げた。
しかしほんの数分で宮坂のケータイが鳴って、彼女はケータイに出て楽しそうに話始めた。
「ごめん。友達がさ。用事があるんだって」と宮坂は言うが早いか鞄を持って走り去っていった。
「もう一本アキレス腱切れればいいのにな」
宮坂の後ろ姿を見ながら三雲が言った。
「そういうこと言うもんじゃないぜ」

「言うもんじゃない？だったら何も言わず取り押さえてアキレス腱を切ればいいのかよ」
へらっと笑いながら言った。
そして何か思い出したように「それよりカラスの死体描かないか？」と言った。
急に「カラスの死体」と言われ、その言葉を認識するまで少し時間がかかった。
モデルがいなくなったから「カラスの死体」
「カラスの死体？」
俺はオウム返しに三雲に聞き返すと「ああ、カラスの死体。あんな箸が転がるのを見て笑ったり、あーだ、こーだ、ぎゃーぎゃー、ピーピーうるさくなくて、ケータイなんて持っているヤツじゃなくて。柔らかな曲線、美しい黒い身体をもっている完璧なモデル」と三雲は答えた。
「それにカラスの死体なんて珍しいだろ」笑って言葉を付け加える。

○

三雲に案内され、いつも通学している路線の電車に乗った。
「それにしても宮坂をそんなに嫌うなよ」
俺は言った。確かに宮坂は少し浮ついた様子だったが、それにしても冷たすぎやしないか、と思う。もともと三雲は何事に関してもクールに振舞っていた。今更言っても仕方ないが宮坂を呼んだ俺の気にもなってくれ。
「見ろよ」
俺の言葉を無視して三雲は電車内の広告を指差した。
「ＡＥＲＡ（アエラ）がどうした？」
「違うよ。隣の女向けファッション雑誌の広告」

「それが？」
「モテってなんだろうな」
ファッション雑誌の広告には「モテ服」という言葉が書いてあった。
隣には「愛され」という言葉も見える。
「やっぱ女は男に好かれたいんだろ？」
「そうだよな。それにしても表紙の見出しにあるモテブラって何なんだろうな。モテ服とか分かるぜ。モテって不得的多数の男に好かれたいってことだろ？女のフェロモン撒き散らせばいいって感じ？けどさ、モテブラってなんだよ？不得的多数の男にブラジャーでも見せるん？」
「ただの宣伝文句だろ」
「そうそう宣伝文句。でもモテという言葉が好まれる。誰も不思議がらない。雑誌を読んだ人の購買力が上がる。だから宣伝文句として成り立つ。女はさ。男に見られてこそ価値があるって潜在的に分かっているんだよ。男に見られてなんぼのもん。それが女のファッション……だろ？」
俺は頷いた。
「だから宮坂も黙って座っていればいいんだよ。しゃべることが女じゃないんだって、女の価値は男に見られること。モテることが女の価値なんだよ。男女の心理は男尊女卑。それが本能。それが女の本質さ。わっかんないヤツだよな」
俺は少し納得しながらも「違うんじゃね？」とその独善的な解釈に一応、反論しておいた。
「おまえも分からないヤツだな」と三雲はため息を漏らした。

○

電車を降りて高台の住宅街に向かって歩く。

この地域の高台には社会の上層部の人たちが住みそうな洗練された家が立ち並んでいた。
ごく一般的な中流階級の家庭の俺には一生縁がなさそうな感じだ。
その住宅街に向かう途中の坂の下の草むらに土で汚れたブルーシートがかけてあった。
おそらく三雲がどこからか捨ててあったものを拾ってきてかけたのだろう。
「ボクの家もこの辺でさ。通学途中で見つけたんだよ。ここでカラスの死体。最初見たときはあまり何も思わなかったんだよね。まぁカエルが車に轢かれているのを見て、汚ねぇなって感じだったんだけどな。でもよく考えたらカラスの死体だぜ？カラスってどこにもいるけど死体は見たことねぇじゃん？駅まで行ったけど思い返して戻ってきて、その辺に落ちてたブルーシートをかけて置いたんだよね」
三雲はカラスの死体を模写するのが嬉しいのか、次第に饒舌になってゆく。
「大体、宮坂のヤツ、何なんだ？ホント、美術部に入りたかったのかよ？女って、いつもああだよな、責任ないって言うか、言葉が軽いんだよ。モデル引き受けておいてお友達に呼ばれたから行きますって、なんだよそりゃ」
ぶつくさ言いながら三雲はブルーシートを剥がした。確かにカラスの死体だ。
一見、どこにも外傷はない。
「多分、自然死。カラスの完璧な自然死だぜ。珍しいだろ？こんなに都会にたくさんのカラスがいてさ。見たことあるか？カラスの死体」
俺は首を横に振った。
「だろ？それが今ここで死んでいる。完璧に外傷なく」
そう言って三雲スケッチブックを取り出し、絵を描き始めた。俺もそれに倣う。でもこんな場所で高校生二人が真剣な表情でカラスの

死体を模写しているのを他人に見られたらどう思われるだろうか。人通りは少ないがなんだか不安になり鉛筆を止め辺りを見回した。
「こんなところでカラスの死体なんて描いて大丈夫なのかよ？」
「大丈夫。見ても誰も何も言わないよ」
俺は三雲の方を見た。三雲はカラスの死体から目を離さず言った。まるで目を離したら今そこにあるカラスの死体が消えるんじゃないかと思っているくらい食い入るようにして見ている。
「雨宮さぁ。他人の目なんて気にすんなよ。今ここにカラスの死体があるんだぜ。今まで腐るほどカラスを見てきたのに死体はまだだろ？朝、目が覚めればゴミステーションに群がるカラスを嫌ほど見ているのに。むしろそんな生き物、風景の一部としてしか見てないのにさ。それがここでこうやって完璧に死んでいる。何か隠しそびれた秘密って感じがしないか？」三雲は一切、手を止めずに話す。
「人間だって同じじゃね？雨宮さぁ、死んだ人、何人見た事がある？せいぜい親戚の年寄りだけだろ？でも世界……いや、日本でも、今この瞬間にもどこかで死体ができあがっている。でも誰もそれを見せない。隠してるんだよ。遺族のためとか、死んだ人のためだとか、そういう理屈は分かる。でも確実に死んでいるんだ。毎日毎日、大量にできあがる死体。それを隠して燃やしてる。カラスもどこでどうなっているのか知らないけど死体を見せない。けれどコイツは見せてしまった。面白くね？」
俺は三雲の言葉を無視して絵を描き始めた。
はっきりいって三雲の話についていけない。
けど三雲の話によってカラスの死体に魅力を感じ始めてきた。
俺が描き始めると三雲も黙った。
お互いカラスの死体を模写する。紙に黒鉛を走らせ、そこにあるカラスの死体を写していく。むしろ存在を切り取っていく。その黒い羽一枚一枚を、その黒いくちばしを、その生気のない黒い瞳を、見たまま忠実に切り取り、紙に載せていくのだ。
そのカラスの死体が紙の上で形になってきた時、小雨が当たってき

た。
俺は三雲の方を見た。
笑っていた。心底嬉しそうに。

「雨当たってきたな」
スケッチブックに雨水が少し吸い込み鉛筆の走りが悪くなってきて、始めて三雲は雨が降っていると言う事実に気付いたらしい。スケッチブックを閉じ、ブルーシートをカラスの死体にかけた。
そしてスケッチブックの宮坂を模写しかけた絵の裏に「模写しています。動かさないでください」と書き置き、その下に自分のケータイの番号を書いて風に飛ばされないように石で固定した。
「今日はここまでだな。なぁ雨宮、ボクんち、寄ってく？」
空は暗くなり雨脚は強くなる一方だった。
遠くで夏の終わりを告げる遠雷が聞こえた。
「いや、帰るわ」
俺は断ってスケッチブックと鉛筆をまとめて駅に向かって歩き始めた。
三雲も俺と一緒に歩く。
「駅まで送るよ。送るってほどの距離じゃないけどな」
電車が来るまで時間があった。
その間の時間潰しに三雲と一緒に話すのもいいかもしれない。
「カラス、どんなになった？」
俺が聞くと三雲は嬉しそうにスケッチブックを開いた。
負けた。完全に負けた。絵を見た瞬間そう思った。
そこにあのカラスの死体が写っていた。
同じカラスを描いたにも関わらず、俺のカラスとまるっきり違っている。
俺のカラスの死体は絵その姿を忠実に写し描いただけだ。
しかし、三雲のカラスの絵は完全に死んでいた。
同じものを描いたのに。

いつもならライバル心が燃え上がってくるはずなのに今回に限っては何も燃え上がらない。
むしろ感動した。完成した絵が見たい。

○

俺たちは駅に向かって歩き出した。
雨脚は次第に強くなっていく。俺たちは鞄から折り畳み傘を出した。
スケッチブックに雨が当たらないように抱きかかえて歩く。

「雨だな。夜には大雨になるかな。カラス、腐らなけりゃいいけど」
「何言ってんだ。雨宮。腐るからいいんじゃね？ただの模写なんて面白くないだろ？そこに写った事実を描くんじゃなくてさ。もちろん描かなきゃなんだろうけど……ボク自身がどう見たかが重要だと思うんだよ。死んだカラスを見てボクがどう感じたか？あれは死体だ。腐って当たり前、腐る死体を模写しなかったらカラスの死体を本当に模写したことにならない」
「ワケ分かんない」
「ボクも自分で何言ってんのか分からない」
三雲は肩をすくめて言った。

駅に着くと電車が来るまでまだ少し時間があったので自販機で缶コーヒーを買って立ち話をした。
カラスのことから奈良美智はアートなのかイラストなのかどうかから、最近、見た映画のワンシーンで出てきた太陽の塔の作者の岡本太郎について、そしてロン・ミュエックの作品を生で見てみたい欲求などなど……こんな話をしても大概のヤツはついてこないし、興味もなさそうだが三雲は別だった。

話がよく合うし、三雲自身の意見も面白い。最後に何の前振りもなく三雲が高校生らしいことを言った。

「あと雨宮さ。宮坂とどうなんだ？」
「どうって？」
「宮坂、おまえに気があるぜ。やってしまえば？」
「やってって……」
何の前振りもない、降って湧いたような言葉に俺の思考が停止した。
「だってそうだろ？ボクらはもう高二だぜ？もう来年は受験だし、高校生活なんて終わりも同然だ。こんな時って皆、想い出作りたくてウズウズしだす時じゃね？やっちゃえよ、雨宮。おまえは宮坂のこと好きなん？」
「別に好きでもないけど」
「だったら好都合じゃね？やるだけやって、はい、さようなら……これから一生を決める受験に別々の大学生活、自然に別れられるし、想い出作りにピッタリじゃん」
「想い出作りって……」
「やったことないだろ？」
そういうと言うことは三雲は「やった」ことがあるということなのだろうか？
これが他のヤツなら見栄とも考えられるが、三雲は見栄を張るヤツではない。
俺は三雲にカラスの絵で負け、性的な面で遅れていることに対して自分自身にイラついてきた。
俺は三雲の問いに答えず切符を買って改札口に行こうと思ったが、その行為が三雲から逃げているようで悔しく思い、俺は三雲に「三雲、おまえ、どこの女とやった？」と聞いた。

「妹」
少し自虐めいた笑みを浮かべながらごく短い返答をした。

目は笑っていない。
俺は言葉を失った。
そんな俺を見て三雲は「じゃ」と軽く手を挙げ踵を返して雨の中、
帰っていった。

穴あきコンドーム

「僕」という一人称がある。
作文で「僕」という一人称を使う高校生はいるだろう。俺だってそうだ。普段、自分のことを「俺」と言うが。けれど作文でなく言葉で「僕」を使っている高校生なんてまず普通はいない。
そりゃ、普通の高校ではない、もっと品のある高校なら「僕」という一人称を使っている人が大勢いるのかもしれないが、あくまで一般的に「僕」を使っているのは俺の周りにはいなかった。
よくよく考えればかかりつけの医者は「僕」を使っていたような気もするが、とりあえず少数だ。
かかりつけの医者と三雲……知っているだけで二人。少数というより、ごく少数。

何故、三雲が「僕」という一人称を使っているのか分からない。親の教育のせいか、周囲の（家庭や親戚関係）環境の影響だろうか、それとも単純にクラスの中で「僕という一人称を使っている自分」というキャラをアピールしたいのか、その辺のところは分からない。
当たり前のように「僕」という一人称を使っていた。
ただ俺には三雲は「ボク」と言う時、何故か吐き捨てるように言っているように感じられた。

いや、それだけじゃない。三雲「僕」だけでなく全てを吐き捨てているというか、何でも投げやりな態度をとっていた。「人生なんてくだらねぇ」とポーズだけのクールさを持っているヤツはいたが、それとは明らかに違っていた。こいつはポーズだけでない。もっと達観したものを身にまとっていた。

○

「おはよう。雨宮、昨日はごめんね」
朝、一限目の授業が始まる前、教科書を机に出して、なんとなくぺらぺらと眺めている時に宮坂に言われた。「ごめん」と言われて一瞬戸惑ったが、宮坂がモデルを友人からの電話でドタキャンしたのを思い出して「ああ、いいよ」と軽く受け流した。
なぜなら、もう人間のモデルは必要ない。

「今日は大丈夫だから、いやぁ。ホントごめんね」
「今日っていうか、もう新しいモデルができたからいいよ」
「はぁ、誰？」

俺はカラスと言おうか、カラスの死体と言おうか、と少し悩んだが、結局「風景画にした」と適当な言葉で誤魔化した。カラスの死体を模写していることが、なんだか禁忌（タブー）のようなものを感じたからだ。禁忌というのも可笑しいかもしれない。ただこういう日常的な場で言ってはならないような、そんな感じ。

それと「カラスの死体を模写することにした」と馬鹿正直に言って「どうしてカラスの死体を模写するの？」と問い返されてもどう答えてみようもない。素直に「動かない完璧な（しかも腐るからなお良い）モデルをスケッチすることにした」と返答したところで宮坂がどういう顔をするのかくらい想像がつく。

「へぇ、風景画かぁ」と宮坂は相槌を打った後、思い出したように「じゃあ、あの後、三雲君と一緒に風景画を描いてたん？土砂降りだったのに？」と言った。

「ああ、雨が降る前に少し描いただけだから」
「ふうん。じゃあ私、これから用無しか」と宮坂は至極残念そうに言った。
「そんなに残念がることもないじゃん」
「だってねぇ。部活もないし、なんだか授業が終わるとふっと時間が空いてさ」
「いいじゃん。塾にでも専念すれば。どうせ三年になれば受験勉強だけだし、部活っていってもあと数ヶ月で終わりだし、ひたすらベンキョーしとけば？」
「そうなんだけどね。なんだか青春サボってるって感じでさ」
「なんだそれ？」
「なんつーか、アレだよ。燃えるものが欲しいワケ」
「燃えるものねぇ」
「ベンキョーだけが高校じゃないし、これから嫌でも受験勉強だしさ。それまでに何かしなきゃいけないような気がしてさ」
「それは分かるけどね。でもモデルやっても仕方ないんじゃね？」
「とりえずよ、とりあえず！……やっぱ部活を頑張っていたせいかな？帰宅部って、なんだか嫌なんだよね」

何気なく普段通り、宮坂と話していたが、昨日三雲の言っていた「やってしまえば？」という言葉を何度か思い出して、なんとなく宮坂の顔を直視することができなかった。
宮坂と話ながら教室の前の方の席にいる三雲の背中を軽くにらんだ。

「それにしてもさ。仲良いよね。三雲君と雨宮ってさ」
「そうか？仲良くないぜ。部活が一緒ってだけで遊んだりしないし」
俺が三雲の背中を見ていたから言われたのか、それともモデルの話の延長で俺と三雲の話になったのか分からない。急に宮坂は話題を変えてきた。

「え？そうなん？」
「ホント、あいつと仲良くねぇよ」
「うーん、でも、なんていうかさ。三雲君って『こっからはボクの領域だから入るな』ってオーラ出していてさ。周囲に壁作ってるじゃん。それで周囲に馴染もうとしないっていうか……だからいつも一人でいてさ。嫌っている人も多いと思うよ。でも一人でいても全然、平気な顔して……でも雨宮といつも一緒だし、仲良くやっていると思ってた」
「ああ、周囲から見ればそう見えるんかな？けどライバルだからお互いズケズケものを言い合えるだけ。そりゃ、お互い同じ趣味だから話が合うところもあるけど、実際はお互いムカついてんだよ。『自分の得意なジャンルで自分に匹敵するヤツがいる』ってさ。でもお互いの実力は認める。けど、馴れ合いはゴメンだね。認めるところは認めるけど、結局、お互い『あいつより自分の方が上』って思っているからさ。仲良くはできない。けれど今の自分以上の実力を身につけるためにはお互いが必要。……なんつーか、そんなところかな？」
「おお、ライバルかぁ……いいっすねぇ。そういう関係」
宮坂は「まさに青春」と言葉を繋ぎ、うんうんと演技じみた頷きをした。

「三雲は周囲に壁を作っている」聞いて、確かにそうかもしれない、と思った。確かに壁を作っていた。それもかなり分厚い壁だ。それはただ単に三雲の個性と言ってもいいかもしれない。自分に属している部分があるか、そうでないか。単純な好悪で人を見る。誰だってそういう傾向はあるが、三雲の場合その度合いが強い。しかも普通より、かなり。

そしていつも一人でいた。自分の個性を……いわば自分自身を理解してくれる人なんていない。それに理解してもらわなくてもいい。

そういう協調性のない子供のようなわがままが三雲の周囲に壁になって存在している。けれど、その壁が三雲独自の世界を深めて行っているように思えた。

おそらくクラスの大多数は三雲を金持ちの息子で自分の殻に閉じこもっている偏狭な男くらいに思っているだろう。けれど三雲が深めていた世界を見ている俺にとって三雲はただの偏狭な男ではない。

「カラスの死体」だ。
リアルの死を切り取って紙の上に書き写していた。
三雲の子供のような笑みを浮かべながら。
あの笑みは平気で虫の足や羽を摘んで取ってその人為的な不具を楽しんだり、カエルの口に爆竹を咥えさせて爆発させたりして喜ぶような類の笑みだった。

偏狭な男というより軽いサイコ野郎。

俺は再び三雲の背中を見た。
ふいに昨日帰り際にどこの女とやったのか、と聞いて間髪入れず「妹」と答えたのを思い出した。
三雲は普段、なんでものらりくらりと冗談を言っているように話す。
馬鹿にされてるんじゃないかってくらい冗談交じりに話す。
（ヤツのことだ。実際馬鹿にしているんだろうが）
「妹」というのも何かの冗談のように聞き取れたが、その言葉には冗談に聞こえないものも感じた。

「なぁ、宮坂、おまえさぁ。兄弟いる？」
思わず宮坂に聞いていた。
「お姉ちゃんがいるいけど、それが？」
「いや、なんでもない」

「もし兄がいるとして、兄とできる？」なんて、とてもじゃないが、ここでは聞けない。
それこそ禁忌（タブー）だ。俺の言葉に宮坂が何か言いかけたが、教室に先生が入ってきたので言うのを止めた。

もう一度三雲の背中を見た。
ただ、制服と艶のある髪の黒さだけが目に入る。
そこにはいつもどおりの冗談交じりの軽い態度も壁も感じない。

俺はヤツの作っている壁を何も感じず、むしろその個性を面白がって入ってきた。
三雲は俺を同類だと思われているか？
いや、壁に入ってきた俺をライバルだと思っている。確実に。
だからこそヤツは俺に自分の真実を見せ始めた。

「カラスの死体を模写しないか？」
ようはこう言いたいのだろう？
「雨宮、君はボクの考えてることが理解できるか？」
ＯＫ。いいだろう。
思い違いかもしれないし、実際そうかもしれない。
とにかくヤツは俺に「カラスの死体」の模写を提示してきた。
今のところ一歩遅れをとっているが、最終的に追い抜いて、ヤツより黒く腐っていく死体を上手く描（えが）いてやる。

これから受験勉強に卒業、別々の大学生活。一進一退の絵の勝負、最後に勝ち逃げなんて、高校最後の想い出作りにピッタリだ。

黒板に書かれたものをノートに書き取りながら、心の中で「シスターファッカーのサイコ野郎」と呟きながら三雲の背を見てノートの端に落書きをした。

簡単なカラスの死体。首だけ三雲。そんな落書。

○

いつものように授業は終わった。だが放課後がにわかに忙しくなっている。担任は希望者に進路について相談を受けているらしい。まだ忙しなさと無縁のヤツらもまだ多くいるが。
学校内の空気が変わりつつあった。

受験に関しては俺は地元の短大に決めていた。
美大という選択もあるにはあったが、親は反対するだろう。なにより堅実な選択を喜ぶ人たちだ。そして何より美術部の先輩の話では画力があってコンテストに受賞歴があったとしても受験は受験で別物らしい。それにデッサン力一つとっても独学では身につかないので予備校なり講師なりについて学ばなければならないらしい。デッサンについては美大に入った美術部の先輩がたまに来て、俺と三雲の絵を見てくれてはいたが、それにしたって、美大ごとに求めるものが違うらしい。つまり色々話を聞くと俺は実力はあるが、美大を受験することとなると、別の問題だということだ。
何よりこの不景気に絵だけで食べていける程、世の中甘くはないだろう。

だからこそ次回のコンテストは最高のものを出したいという気持ちがあった。
とりあえず、ここ数日はコンテストに向けて、カラスの死体で練習しようと思っていた。
けれど昼間は晴れていたが急に曇り始め、今は雨が降っていた。
今日はカラスの死体の模写は無理ということで、普通に静物画のデ

ッサンをしようと言うことになり、俺は美術室の前で三雲を待っていた。
美術室の鍵を開けるのは副部長の仕事だからだ。
十分くらい美術室の前で待っていたが、三雲は教務室へ行ったきり帰ってこなかった。
仕方なしにスケッチブックを開いて自分の描いたカラスの死体を見ながら、三雲が描いたカラスの死体とどこがどう違うのか考えていた。
しかし、どこをどう見ても同じカラスに違いない。
けれどあの時に見た三雲のカラスは何かが違っていた。
自分の描いたカラスに見飽きた頃、「悪りぃ、悪りぃ」と全然悪くなさ気に三雲が鍵を指でくるくる回しながらやってきた。

「早くしろよ」
「いやぁ、進路についてセンセーにつかまってさ。今、また教務室に戻らなきゃならなくなって。ったく、あのおっさん、なげーんだよ。ハナシがさ。つか、自分の将来くらい自分で決めさせろって。なんつーか、ボクが決めてることなんだからさ。それでいいんじゃね？アンタに決められたくねぇんだよって、……つーことで、まぁこれから進路についてのハナシらしいんで、鍵だけ渡しにきた」
そういうと鍵を俺に投げてよこした。

「お疲れ様。で、おまえどこの大学にするんだっけ？」
「T映画・映像専門学校。映画監督になりたいのにさ。それが『おまえの学力ならW大狙える』だって、ばっかじゃねぇの……」
映画監督と聞いて、ちょっと心の平衡感覚を失った。
どこでどうなって三雲が映画監督を目指し始めたのか分からない。
そして三雲に東京のW大を狙える学力があったのか、と意外な気がした。

俺はこいつのことをある程度知ってると思っていたが、思っていたより俺はこいつのことを知らないのだと今更ながらに気づかされた。

「そんなわけで雨宮、悪りぃけど、今日は死体も描けないし、コンテスト作品も描けないからさ。今日は一人でゆっくりやってくれよ。なんなら宮坂でも呼んでプライベートなデッサンしても構わないしさ」

「ほらよ」とポケットから小さく薄っぺらな正方形のものを取り出し俺の手元に投げた。

受け取って見るとそれはコンドームで、なんの冗談か真ん中には針か何かでくっきりと穴が空けられていた。「責任取れないならゴムは付けねぇとな……じゃ、がんばれよ」と、教務室へと戻って行った。

相変わらず、どこまで本気でどこまで冗談か分からない。

穴の空いた使えないコンドームを学校のゴミ箱に捨てるわけにもいかずポケットに締まった。

窓を見ると雨がまだ降り続いて、一向に降り止む気配が無い。

とりあえず鍵を開け美術室へ入り、スケッチブックを取り出し、またカラスの死体を見た。

三雲に会った時、三雲の描いたものを見せてもらうんだったと思ったが、一抹の悔しさもある。

コンテストに向けての作品でも描こうと思ったが、スケッチブックを開くと俺はカラスの死体の続きを描き始めた。

脳裏の中に残っている死後硬直しているカラスの姿をスケッチブックに写してゆく……必死に思い描き、鉛筆を走らせた結果、完全に死んだカラスが描けた。

けれどそれはあくまで俺の想像のカラスの死体で本当の死ではなかった。

もっと身体は死後硬直で固くなっているはずだし、黒ももっと生気

のない黒さだった。こんなわざとらしく嘴(くちばし)を開けているはずは無い。
想像だけではやっぱりダメだ。実際、死んでいるカラスが今欲しい。

そんな時、がらがらと美術室のドアが開いた。
三雲かと思ったがヤツなら、こんな恐る恐るドアを開けたりしない。

「雨宮いる？」
宮坂がまた昨日のように恐る恐る顔を覗かせた。

仮面と告白

「雨宮いる？」と、恐る恐るドアから顔を出しながら宮坂が言った。美術部で普段から部活動をしている人といえば俺と三雲くらいなのは宮坂も知っているはずだ。
それなのにあえて俺の名前を呼ぶって事は、よほど嫌われてるな、三雲。
「いるけど、どうしたん？」
俺の声に宮坂は美術室に入りながらきょろきょろとあたりを見回した。その視線は三雲を探しているのだろう。
「ああ、三雲なら進路のことで担任に捕まったみたいでさ。今日はいないから」と俺が言うと「いや、そういうワケじゃないけど」と宮坂は少しほっとしたように答えた。

「そんなに嫌いなん？」
「嫌いっていうか、とっつきにくいんだよね。それよりさ。何描いてんの？」
俺はスケッチブックを閉じて「いや、落書き」と誤魔化した。
別に見せてもいいし、逆に感想を聞きたいくらいだが、説明するのが面倒臭い。
「このカラスの死体はちゃんと死体に見える？」そんなこと聞いてどうする？
俺まで三雲と同じように煙たがられても面白くない。

「それにしてもどうしたん？燃えるもんでも見つけた？」
「いやぁ、まだ見つからないけど……とりあえず、モデルになってあげようかなって」
ちょっと前まで……いや、昨日まで、人物のデッサンの練習するこ

とがなかなかできなくて、人物のモデルが欲しかったわけだが、今「モデルになってあげようか？」と言われても、それほど人物のモデルを欲していない自分がいた。けれどせっかくやってくれるんだから嬉しいといえば嬉しい。

「ありがたいね。じゃあ椅子に座って……ポーズは楽な格好でいいから」

「うん、じゃあ」と、宮坂は美術室の脇に並べられた椅子の一つを手に取り、美術室の真ん中に置いてそこに座った。緊張しているのか、動きも姿勢も少し固かった。

「あ、そんなにかたっくるしく考えるなよ。動かなけりゃいいからさ。あとケータイは厳禁な」

うん、と宮坂がうなずくのを聞くと、俺は宮坂を描くべく、スケッチブックを開いた。

開いたページはちょうど、さきほど想像で描いたカラスの死体が描かれていた。

そうだ。人物にそれほど興味がなくなったのは、このカラスの死体のせいだ。

三雲の描いたカラスの死体以上のカラスの死体を俺は描きたい。

宮坂を上手く描いたところで、それはただの練習でしかない。

「ねぇ、ポーズは座っているだけでいいの？」と宮坂が言ってきたので我に返って「まぁ、テキトーでいいよ。……いや、できればもうちょっとリラックスして、肩凝らないようにさ」と俺は宮坂の緊張をほぐすべく笑いながら言った。

「分かった」宮坂は俺の笑みに答えるように笑って言った。

鉛筆を取り出す。美術室内は静かで、ただ雨がガラス窓を強く叩く

音だけがやけに大きく聴こえた。
そのガラス窓を叩く無数の雨粒を宮坂は黙って見つめていた。
俺は宮坂の姿を見ながらスケッチブックに鉛筆を走らせた。
押し黙ってガラス窓を見ている宮坂の横顔はバスケをしていた頃より、少し穏かな感じに見えた。あの頃のシャープな雰囲気とか明らかに違っていた。バスケ部のエースという重荷を背負わなくてもいいからか、何か角が取れたような感じだ。それと顔に少し暗い翳が指していた。

「ねぇ話をしてもいい？」
「いいよ。っていうか、俺がちょっと聞きたいんだけど……もうリハビリとか行かなくてもいいん？」
「うん。もう終わったから。あとはアキレス腱が完全にくっつくのを三ヶ月くらいだよ。治った頃にはもう高三。高校の部活動とはもうオサラバっすよ。運動は全部ダメでアキレス腱がくっついてもしばらくは激しい運動は控えた方がいいってさ。だから絶対動かないモデルって適役でしょ？」
「まぁ、ありがたいけどさ。モデルなんてやってないで昨日みたいに仲間と遊べば？ホントもうすぐ受験勉強が嫌でも始まるワケだしさ」

俺の「仲間と遊べば？」という言葉に「分かんないヤツだな」と言いたそうに宮坂の顔が曇った。

「うーん、私さ。友達っていったらバスケ部繋がりの友達が多かったんだよね。そんでバスケできなくなって部活動できなくなると接点がなくなったというか、なんというか……」
「昨日みたいに気楽に遊ぶ相手がいるじゃん」
「昨日誘ってくれたのは帰宅部の子なんだけど。違うんだよね、何

か。ちょっと仲の良い子と一緒にカラオケ行ったんだけどさ。何か気を使ってしまうというか。ぶっちゃけ合わないっていうか。無理しても仕方ないしね。まぁやることないから、こうやって、少しでも人の役にでも立とうかと思ってさ」

「大変だねぇ」宮坂をいたわるように言った言葉だが、俺の口から出た言葉はまるで他人事のように自分の耳に聞こえた。もっと気を遣って言うべきだったか、と思ったが「そう、大変なんすよ」と宮坂は俺の口調なんて気にせず、おどけたような口調で答えた。

なんとなく三雲の「宮坂、おまえに気があるぜ」という言葉を思い出す。

本当にこいつは俺に気があるのか？

よく分からない。

もともと宮坂とは高一の時からたまたま同じクラスになって何度か隣の席になって、なんとなく話しているうちに仲良くなっただけの存在だ。特別な感情というものを感じたことはない。授業が始まる前か休み時間にちょっと世間話をして終わり。それ以上の存在ではない。

俺に気がある、としたら宮坂はどこでそういう感情を持つようになったのか？

そもそも三雲に言われたから、そう感じるだけであって宮坂は俺と同じように仲の良い異性くらいにしか思ってないかもしれない。

なんとなくアキレス腱を切った時に宮坂が俺のケータイに連絡をしてきた時を思い出した。

無理に笑ったような声で「今日学校休んだのはさ。昨日部活の時にアキレス腱切っちゃってさ。ドクターストップ。バスケできなくなったみたい」と。それに俺は「美術部の俺に言っても仕方ないぜ」と素っ気無く答えた。だいたい、そんなこと俺に言うよりバスケ部

のみんなに言った方が良いに決まっている。

俺の返答の後に電話の向こうで沈黙があった。
その沈黙は宮坂が急に電波の届かないエリアへ行ってしまったような完全な沈黙だった。「おかけになった電話番号は　現在電源が入っていないか、電波の届かないところにいるため、かかりません」
そんなアナウンスが流れれば少しは救われたかもしれない。けれどその沈黙は電源や電波のせいでなく宮坂自身が作り出した沈黙だった。そしてその沈黙は俺の言葉を不適切で間違っている言葉だと責めているように感じられた。
その沈黙の後に「いやぁ。運動部がダメだから美術部に行こうかなってさ」となんら俺を責めるわけでもない宮坂の明るい声での返答があった。だから俺は「まぁ絵が上手くないヤツが来てもな……モデルなら募集中だけど」と少し気を使って言ったのだ。
ほら、ただ仲の良いクラスメート。

そんな頭の中の思考とは別に、絵を描くという思考が脳内にあり、その思考が手を動かし続け、宮坂の姿をスケッチブックに写していく。雨音すら聴こえない。ただわずかに収縮を繰り返す宮坂の胸部が何か歪みのように感じれた。何故、その当たり前の動作が歪みと感じられるのか少し悩んで、すぐにカラスの死体を思い出した。

そうだ。できれば椅子に座るなんてありきたりなポーズじゃなくて、このリノリウムの白い床に冷たく寝そべってくれればこの歪みを少なくすることができるのだ。この白い床はあのカラスの死体のあった場所よりここはさらに無機質で生の匂いがしない。できれば息も止めてくれれば、なお良いかもしれい。……できれば息も止めて？
まるで三雲の発想だ。

俺は鉛筆を止め「ちょっと休もう」とつぶやいた。
その声に「ふう」と宮坂はため息を漏らした。
宮坂の肩にあったわずかな緊張もほぐれ、俺の耳にガラス窓を打つ雨音も戻ってきた。

「さっきの話の続きだけど、じゃあバスケ部の仲間とはもう遊ばないん？」
「まぁ遊ばないわけじゃないけどさ」そう言った後、ちょっと難しそうな顔をして言った。
「うまく絡めないっていうか……なんつーか、さ。今まで私、バスケ部のエースだったじゃん。それでスポーツ万能で明るく元気なヤツ、なんて思われていてさ。まぁ実際そうだったんだろうけどさ。……自分て何なんだろうね。そんなこと最近独りになると考えるんだ。結局のところ学校生活って自分自身を全部出すことってできないじゃん。みんなに仲間外れにされないように仮面かぶっているっていうか、みんなに決められたキャラを演じないといけない、っていうかさ。考えすぎかもしんないけど。私、アキレス腱切って『スポーツ万能で明るく元気なヤツ』じゃなくなったんだよね。いきなりさ。『元・スポーツ万能で明るく元気なヤツ』になったというか、まぁみんな同情はしてくれるけど、もう以前の仮面をかぶろうとしてもかぶれないし、みんなの知っているキャラと違う私をみんなどう扱っていいのか分からないというか、なんというか。もう受験控えているし、クラスの空気も変わってきてるじゃん……なんか居場所ないんだよね」
緊張がほぐれてリラックスしたのか、何か堰を切ったように宮坂の口から言葉が溢れた。

「仮面？」
俺は鉛筆を削りながら聞き返した。
いつもは休憩時間に授業やクラスメートの事を少し話すだけだった

し、こういうマジメな人生観みたいなことを何の気兼ねもなく話すヤツだとは思ってもみなかった。こういう小難しいことをさらっと言う宮坂が少し新鮮に感じられた。

「そう、例えば私なんてスポーツ万能じゃないし、ただ姉が持ってたバスケ漫画の影響でバスケが好きになっただけで、ホントは休日は部屋にこもって漫画読んでれば幸せみたいな人間だし、明るくなんてないしさ。ナーバスになると、どこまでも落ちていけるし、元気じゃないし。ただ、みんながそういうふうに私を見ている内に私自身も自分がそういうキャラだと思うようになってさ。でもバスケできなくなってから、ようやく本来の自分に戻ったような気がするんだけど、そんな自分に私自身が違和感を覚えてる……変な話でごめんね」

「その考え、おもしれぇかも」

「こんなこと考えてる時点で明るくないしね」宮坂は言うだけ言ってちょっとスッキリしたという笑みを浮かべながら「でも雨宮には当てはまらないでしょ？だってキャラ作ってないし」と言った。

「集団にいないからな。っていうか、ただトモダチが少ないだけかも」

「そうそう、トモダチ多いとニンゲン関係が大変なんすよ」

困ったような笑ったような顔で俺の言葉を受け流した。

ちょうどその時、宮坂のケータイの着信音が鳴った。一瞬、宮坂は俺の方を見たが、今は絵を描いていない。俺は「出ていいよ」と言いながら二本目の鉛筆を削り始めた。

宮坂はケータイを取り出しディスプレイを見ると、いきなり閉じた。

「何で閉じたん？」

「いや、本当にニンゲン関係が大変でさぁ」今度は本当に困った顔をして言った。

「付き合ってくれって告白されて……」
その言葉に俺は少し驚いた。
宮坂は確かに顔もいい。目が一重目蓋でやや細く、鼻が少し低いかもしれないが気になるほどでもない。そして誰とでもよく会話をするヤツだし、人当たりもいい。当然好意を持たれることもあるに違いない。むしろ今まで彼氏がいなかったのが不思議な感じがした。

「じゃあ、付き合えば？」
「でもさぁ。なんとなく嫌っていうか。……うーん、ケータイのアドレス教えるんじゃなかった」
俺の問いに答えながら宮坂はケータイを再び開け、ディスプレイを睨んだ。

「今までトモダチだったヤツがいきなり『付き合ってくれ』ってさ。……ワケ分かんないから」
「じゃあ、俺が告白したら？」
思考より先に言葉が出ていた。
俺自身、自分が何を言ったのかよく分かっていなかったかもしれない。
しかもその言葉の後に「やっぱ、ワケ分かんないか？」とご丁寧に言っていた。

キスからキスまでの問題点

「じゃあ俺が告白したら？やっぱワケ分かんない？」
自然に口から言葉が出ていた。声は通常の口調と変わったところはなかったが、内心焦った。
まるで俺が宮坂に告白しているみたいじゃないか。いや、「みたい」じゃない。これは告白だろう。

どうしてこんな言葉が口から出たのか考えてみると「宮坂、おまえに気があるぜ」という三雲の言葉を思い出す。どうしてこんな言葉が俺の口から出たのか。ただ自分が宮坂にどう思われているのか知りたかっただけなのか。もしかしたら実際、俺は宮坂のことが好きなのか。だから宮坂が「告白された」という言葉に反射的に反応してしまったのか。

俺は再び宮坂の顔を見て「冗談だよ」となし崩しにすまそうとしたが、宮坂は少し困った顔をしながらも目は俺の顔を真剣に見つめていた。
その顔を見て俺は確信した。確かに宮坂は俺に好意を持っている。

少し鼓動が高まるのを感じて宮坂から目をそらし削った鉛筆の芯を手の内で眺めた。
俺は何も言わず、ただ宮坂の答えを待った。

どう答えてもらってもかまわない。どうせイエスでもノーでも俺のポジションは変わらない。
どうせクラス内でも個人主義者で通っている俺だ。失恋しようが、恋が始まろうが、他人に何を言われても一向に構わない。俺が宮坂に知らず知らずに恋愛感情を持っていたとしても、それに俺自身が

今まで気づいていなかった。そんなささやかな恋愛感情だ。もし今ここで失恋したなら少しは自尊心が傷つくかもしれないが、失うものはそんな少しの自尊心と授業から授業の間の休み時間の話相手を失うくらい。単純にそれだけだ。

「それって……」半分困って、半分笑った顔で宮坂は言った。

「俺と付き合わない？」俺は微笑んで言った。

どう転んでもいいが、自尊心を傷つけられるのは少し嫌だ。

宮坂の少し困ったように下を向き言葉をつぐんでしまった。俺はその間をどう取り繕っていいのか分からず、鉛筆を手の内で転がしてから、しばらく窓ガラスを打つ雨粒と暮れゆく雨空を眺めた後、宮坂に「明日もモデルに来てくれる？」と言った。

「うん」

俺の言葉の後に少し間をおいて宮坂は少し嬉しそう言った。

その言葉は俺の耳には限りなく肯定の言葉に聞こえ、なんだかほっとした。

どういう意味でほっとしたのか？

結局のところ、単純に宮坂が俺に気があるのか、どうなのかを確認できたということだ。

その答えは得られたし、この後、なんとなく面倒臭くも楽しそうなものが待っている予感もする。

ただ少し胸にわだかまりのようなものがあった。

この俺の宮坂への告白（告白とはいえないかもしれない）が三雲の「宮坂、おまえに気があるぜ」という一言によってできた状況だということだ。その一言がなければもしかしたら俺は宮坂にこんな言

葉をかけなかっただろうし、特別意識せず、卒業を迎え、別々の進路を行き離れ離れになって、数年後に同窓会でもあれば「やあ、懐かしいな」で終わる仲だっただろう。それがこのザマだ。恋愛？恋人？彼女？正直よく分からない。そもそも人を好きになるってなんだ？そんな得体の知れない恋愛ってヤツを三雲の言葉に動かされて始めたようで、なんだか自分自身が許せない。そして宮坂に特別な感情を持っていない俺にとって、宮坂とは「自然に別れられる想い出作り」になる可能性も高い。

「今日は終わり」と俺は宮坂に言って鉛筆を筆入れに戻し何気なくポケットに手を入れた。
そのポケットの中には三雲が俺に渡した穴の開いたコンドームが何かの呪いのように存在していた。

○

「じゃあ美術室の鍵、教務室に返してくるから」
「そう、じゃあね」

宮坂は軽く手を振って帰ろうとした。なんだか肩透かしを食らっているようで「駅まで一緒に帰らない？」と言った。けれど「またね」と笑顔で言われ、俺も「じゃあ」と手を軽く振って廊下で宮坂を見送った。

告白してＯＫをもらったはずだと思っていたが、違うのか、と自問自答してみる。
結局、答えは出ずに教務室へ行こうと後ろを振り向くと廊下の向こうから三雲がこちらに走って来るのが見えた。

「よお」と駆けてきた三雲が俺に言った。「今、宮坂と一緒にいただろ？うっわー、ボクがセンセーに長々と説教食らっているときにプライベートモデルで練習？いやぁ、いいねぇ。ったく、部長さんは。でも渡してよかったよ。コンドームをさ。……使った？」

「んなもん使うわけねぇだろ」

「使わなきゃダメだろ？責任取れるん？」

いつものように口の端だけ吊り上げるだけの笑みを浮かべて、校内で不謹慎なことを大声で言う三雲に俺は「返しておけよ。副部長」と美術室の鍵を放って渡した。

三雲はそれを受け取ると「じゃあ教務室にコレ返してくるから駅まで一緒に帰らね？」と言ってきた。

今さっき宮坂と一緒に下校しようとして断られたばかりで、次に三雲に一緒に下校するのを誘われる。なんだか、ちぐはぐで妙な気分になったので「一人で帰る」と言った。

三雲は「一緒に帰ろうぜ。宮坂のヌード描いたんだろ？見せろよ」と子供じみたことを言っていたが、俺は三雲に構わず玄関に向かった。

「ちょっと待てよ！」

後ろの方で三雲の声が聞こえたが俺は無視して歩いた。

外に出るとまだ雨は上がらず、いつもより薄暗くなっており、道路の街灯と体育館から漏れる明かりがやけに明るく見えた。傘を持って来なかったが、傘立てにコンビニでよく見る安物のビニール傘が置き忘れられていたので、それをありがたく拝借すると俺は駅に向かって歩き始めた。

長く降り続いている雨はアスファルトに多くの水溜りを作っていた。俺の履いている薄い布性のコンバースでは容易に雨水に濡れてしまう。俺は下を向き水溜りに足を入れないように歩いた。

宮坂とは駅まで一緒だ。別に一緒に帰ってもよかったはずだ。単純に廊下の向こうに俺たち二人に向かってきた三雲の姿が見えたから、一緒に帰ることを拒んだのだろうか。まぁそれならそれでいいし、別の理由だとしてもいいだろう。例えば俺が勘違いしているとか。

でもこうやって宮坂のことを考えている自分がよく分からない。例えばだ。もしこのまま付き合うとして。

いや、「付き合う」「交際」とはそもそも何なんだ？

大人の男女の関係は分かる。しかしそこへ至るまでの経緯がよく分からない。

デート？それはどうやってやるんだ。

俺が言うのか？「遊園地でも行かないか？」「動物園でも行かないか？」とか。

そう言って俺が宮坂と一緒に遊園地なり、動物園なりを歩くとして、それからどうすればいい？一緒に手をつないで微笑みを交わしながら歩く姿を想像したが、それはテレビドラマのように安っぽく、作り物じみていた。

結局、何がなんだかよく分からない。キスとその先は理解できて、他はまるで理解できない。もしこれから宮坂と付き合うとして何をどうしたらいいんだ？

簡単に言うと、だ。

キスからキスまでの間をいかに過ごすか、それが問題だ。

その時、後ろから唐突に何かがぶつかって俺はよろめいて水溜りに

右足を入れてしまった。
一瞬で靴は濡れ、靴下越しに冷たい雨水を感じた。

「ったく、置いて行くなよ、部長」と言う声に後ろを振り返れば、三雲がいた。
髪が雨に濡れ、走ってきたのか息を弾ませ「傘忘れたんだよね」と言った。

「てめぇ、足濡れたじゃねぇか！」
俺が怒ると「まぁまぁまぁ……」と雨で濡れた髪の毛をハンカチで拭きながら、相変わらず感情の薄い形だけの笑みを浮かべながら傘の中に入ってきた。

「コンバースって本来、バスケシューズじゃん。内履きなんだよね。雨には不向きだし。こんな時に履くもんじゃないよ。まぁ傘忘れたボクが言うもんじゃないかもしれないけど」と言った後、思い出したように「そうそう、見せてよ、絵」と言って俺が小脇に抱えているスケッチブックを見た。

「駅に着いてからな」と俺が言うと三雲は「よし」と頷いて一緒に歩き始めた。
それにしても男二人で相傘なんてシャレにもならない。これが宮坂ならなんとなくいい感じもするか？
いや、なんとなく面倒くさいし、その光景を人に見られるだけで気恥ずかしい。
付き合うとそれが当たり前になるのか？
結局、宮坂との関係はよく分からないことだらけしか待っていない。
駅に着くと帰宅する人でごった返しており、待合室の椅子も案の定満員だった。

仕方なしに俺たちは駅構内の隅にある自販機の脇、美術とはまるっきり無縁の埃っぽいところでスケッチブックを三雲に手渡した。

二人だけの美術部だ。率直に意見は言い合うことにしている。
良いことも悪いことも忌憚なく言い合う。
そりゃ、ライバル同士見せ合って意見を言い合うのは気分が悪い。けれどそうしなければ上達しないと思っている。美大に行って暇な時にうちらを見に来てくれる美術部の先輩曰く「デッサン力は質と量。たくさん描いて、けれど一枚一枚に集中する。そして厳しい目で自分の弱点を見つけ改善していくことだ」だ。
厳しい目で自分の弱点を見つける、なんて簡単だ。三雲に話をさせればいい。
口を開けば毒を吐く。評価に関しても辛辣だ。けれど、どこか公正なところもあった。
それに三雲に見せることに対してビビっていたら、三雲に負けているようじゃないか。
いつかコイツを俺の前に跪かせることが俺の目標でもある。

「いいじゃん、これ。死んでる」
意外な言葉を三雲が言った。最後の死んでるは消え入りそうな声だ。長年の付き合いだから分かる。この声は明らかに自分の負けを認めている声だった。
少し誇らしげに思ったが、死んでいるとは落書きで描いたカラスのことだろう。あれくらいで関心されても少し困る。俺は三雲を少し買いかぶりすぎていな、と思ったところへ「カラスは全然だけど……」と椅子に座った宮坂を描いたページを出し俺に見せた。

「これはいい」と言って俺に見せた後、三雲はもう一度その絵を観察していた。
それはスケッチブックの上に描かれた椅子に座っている宮坂の描き

かけの絵だ。
描き込んだのは顔だけだったが確かにその顔は死んだ人のように見えた。
ふと描いている時のことを思い出す。俺は宮坂を見て、何を思ったのか？
リノリウムの床で冷たくなって横たわった宮坂だ。

それはやはりデッサンではなく、単純に自分の妄想を描いているものだ。
練習なんだからもっと人として描けばよかった、と俺は思う。
けれど三雲は違うらしい。

きっとこの差なんだと薄っすらと気づいてきた。
あの三雲の描いたカラスの死体と俺の描いたカラスの死体の差。
あれは三雲の思い描いた死が俺に迫ってきたのだろう。
俺は何か掴んだような感覚を覚え、三雲からスケッチブックを奪うともう一度、絵に描いた宮坂を見た。

このイメージなんだ。
俺は自分の絵を見て頭の中にその感覚をしっかり刻み込んだ。

「それにしても」三雲が言った。「宮坂とはどうなん？」

俺はスケッチブックを閉じて駅構内の壁に掛けられている時計を見た。
できれば家に帰って今の感覚で何か描いて見たかったが、電車が来るまで少し時間があったので、少し三雲と話をすることにした。

「どうって？」
「やれそうか、ってハナシ」

そうだ。コイツのお陰で悩んでいるんだ。いや、悩みと言っても悩みらしい悩みではないかもしれない。嫌だったらいつでも止めれるし、もしかしたら俺の勘違いかもしれないのだ。
やれることはやれるかもしれない。しかし、三雲のペースに乗るのが嫌だった。

「できそうもないね」と素っ気無く答えた。
「できそうもないかぁ、でもさ。スゲーよな、日本の法律って……」
「いきなり話がでかいな。日本の法律って」
「いやさ。ボクたち十六、七じゃね？この年齢って女は結婚できるんだぜ。男女お互いの了承済みなら、五十のおっさんと宮坂は結婚できる。つまり、あの宮坂の引き締まった体の上にデブったおっさんが乗っかって腰振ってもＯＫなワケじゃん。法律的に。しかもゴムなしで。でもボクたちは法律的には一切手を触れてはいけません。陰でやってもいいけどゴムつけてね！みたいな。そりゃ社会的に未熟なワカゾーだから仕方ないけどさ。ワカゾーにはワカゾー同士の愛があるワケよ。つまり女と男の結婚できる年齢が一緒でもよくね？とボクは思うワケ。でも一般的に考えてよくない。赤ちゃんができたらさぁ大変。ハイティーンのボクらはどうする力もない。でも五十の男で社会的に地位も収入もある人間ならどうにでもなる。十六の女の子を孕ませても。……なんつーか、一種の暴力だよね」

そう言ってこちらを伺うような笑みを浮かべながら「もし五十のおっさんが宮坂をどうにかできるんだったら、キミが宮坂をどうにかしたいと思わない？つか、そっちの方が清潔だよね」と言った。

三雲の言い方はいつも流れるように耳の中に入ってくる。けどそれは三雲の口調や声のせいでそう聴こえるだけで聞いている人が不快になることを平気で言う。今回だって遠まわしに言わなくても「『

できそうもない』とか、さらっと言ってんじゃねぇよ。おまえ、宮坂とやりたいだろ？自分以外の人間が宮坂と寝るのが許せるのか？」と言えばいい。コイツはどういうワケか俺を不快にさせたいらしい。俺をけれど俺の答えは決まっている。どうせ宮坂が誰と寝ようと変わらない。俺は俺。アイツはアイツ。それで完結している。俺と宮坂を結びつけたのは三雲だ。その三雲の妄想に俺は踊らされてしまっただけだ。たまたま偶然が重なって。だからこの偶然の産物をどう処理するか困っている。

だから俺は「いや、いいんじゃない？五十のメタボが宮坂の上に乗っかって、脂汗かきながら腰振って、ベッドを軋ませて、宮坂が口の端からよだれを垂らしながらよがり狂ってもさ」と笑顔で答え「で、なんでおまえは俺をそんなに宮坂とくっつけたいワケ？」と言った。

その言葉に三雲は「雨宮、キミさ。ホントに宮坂には気がないんだ。宮坂も不憫だねぇ」とつぶやいて、真剣なまなざしで俺を見て言った。

「なぁ雨宮、ボクと付き合わない？」

赤い糸とラブレター

まだ何も知らない幼い男の子がいずれ自分が恋をすることを知る時、（陳腐な表現だが）女の子が白馬の王子を思い描くように、男の子は理想の恋人を想像するだろうか？

答えは「イエス」。少なくとも幼い時の俺はその異性の理想像を思い描いていた。けれど振り返ってみれば、その相手は生身の人間でなく、テレビのドラマに出てくる女優や雑誌に載っているモデルのような容姿で、俺にとって都合のいい性格を合わせもった女の子であり、現実の女の子とは大きくかけ離れたものだった。

それは俺の頭の中だけ存在しており、俺以外、決して誰も触れることのできない、可愛く美しい女の子。そしてその存在全ては俺の気持ちに合わせて行動してくれる、ただ自分にとって都合のいい想像にすぎない。その理想の女の子と想像の中で恋をしたことがあった。

それが俺の人生においての恋愛の全てのようなものだ。

しかし、その理想の女の子は俺の成長と共に（それはわりと早いうちに）いつの間にか、その清らかさや美しさ神秘性を失い、単純に俺の性欲のはけ口に代わっていた。

頭の中でその理想の女の子の代わりにリアルな存在である宮坂を当てはめて見る。だが、不適切だ。どう見ても。宮坂と寝れるか？寝ることはできるだろう。俺は健全な男子だ。けれど寝る以外はどうやっても想像することができなかった。

俺の中で恋愛と性交の境界線は曖昧で、限りなくイコールだ。

けれど恋愛という言葉にどこか神聖なものを感じる。少なくともハイティーンの俺には。
結局のところリアルで恋愛をしていない俺には恋というものがよく分からないのかもしれない。
恋焦がれる？君に会いたい？
それらの言葉はまるでここではないどこか遠くの国で起こったニュースみたいに感じる。

女の子と付き合う？何をどうしたらいいんだ？
異性だろうと単純に友達付き合いなら分かる。けれどそれ以上となるとベットの中を想像する以外はまるで想像ができない。休日に女の子と一緒にショッピングだの公園だのレストラン、映画へと出歩く。何のためなのか必要性を感じない。これに必要性を感じれば恋なのだろうか？「一緒にいれば楽しい」という関係をお互いが感じられるのならば。

宮坂と一緒にいたいか？と問われれば「ノー」だ。宮坂は学校内の隣の席の存在で、それ以上でもそれ以下でもない。確かに可愛いかもしれない。性格も明るくいいヤツだ（仮面を被っているとは言っていたが）。けれど一緒に出歩くとか、何気なく部屋で一緒に過ごすとなると何か違うような気もする。想像してみても正直面倒くささしか感じない。

一緒に過ごして楽しければいいのなら、別に女の子でなくてもよくないか？例えば、俺に「ボクと付き合わない？」と言った三雲となら話は合うし、気兼ねなく話せる。それこそズバズバと容赦の無いストレートな言葉だって言い合える。そして同じ趣味を持つもの同士の楽しさもある。（おまけでライバル心もついてくるが）つまり、さっきまで考えていたキスからキスまでの問題点は一切クリアできる。

ただしそこまでだ。それ以上は趣味じゃない。
三雲の言葉に対して俺は「嫌だ」さらりと断った。案の定、俺の言葉に三雲の目から真剣さは消え「まったくキミは指に絡んでいるこの運命の赤い糸が見えないのかよ？」と笑みを浮かべながら言い、左手の小指突き出し俺に見せた。

「ああ、全然見えないね」俺の目には三雲の小指にある赤い糸なんぞ見えない。
むしろ運命の赤い糸が見える人間がこの世界にいるとは思えない。小指に赤い糸が見えるヤツはきっとこの世界を見てないのだ。赤い糸なんて白馬の王子様やら理想の女の子が見れる妄想という目でしか見えないのだ。その妄想を抱けない俺にとって恋なんて、ただの幻想かもしれない。

「男と付き合うなんて趣味じゃないし」と俺の言葉に三雲は「そう？っていうか、女にもキョーミないとかじゃね？」と俺の思っていることをずばっと言い当てた。

「まぁな。今はまだ俺、お子様だからさ」
お子様？いや、お子様だからこそ妄想をし、恋をする。今、覚めている俺はいつ恋をするんだろう。恋愛感情を持たず性欲だけをもてあましている俺は風俗でも通うようになるのか？俺の脳裏に大人になった俺が夜のネオンがきらめく風俗街を颯爽と歩く姿が横切った。怖いくらいに鮮明に。

「つか、三雲、おまえはどうなんだよ？マジでゲイ？」
「ゲイって、キミのことじゃね？」
そういって俺のスケッチブックの描きかけの宮坂の絵のページを目

の前に広げた。
「どういうコンセプトで描いたのか知らないけど、ボクが最近描きたいと思っているテーマを描いている。描ききっているといっていい。やっぱカラスの死体からの連想？まぁいいや、それは明日にでもゆっくり聞くとして、宮坂だ。男と女が二人っきりで一緒の部屋で親密な会話をして描いた絵じゃないような気がするんだよね。憶測だけどさ。宮坂が女っぽくない。つーか、なんつーか……」そう言った後、少し言葉が泳いだ。そして適切に表現できる言葉を探すような沈黙の後、弾けるように言った。
「性的なものを感じないっていうか、うん。性の匂いがしないんだ。まるで彫像を模写したみたいに。んで直感的にピンときたんだ。もしかしたらって……」

「俺はゲイじゃない」
俺の言葉に三雲は「ふうん」と頷き、駅構内の時計を見た。
その俺の言葉なんて無かったような素振りで。
そして三雲は言った。

「社会とか世間、システムとかってさ。大多数の常識でできていると思わね？まぁ社会なんて大多数によって構成されているから、大多数の常識でできていた方がうまくいくんだろうけどね。でもボクらは個人だ。大多数じゃない。だから社会や世間やシステムに息苦しさを感じて当たり前じゃね？」
「何の話だよ」
「さぁ？ただ普通でないと人間生き難いけど、普通ってただ大多数の常識ってだけなこと」
洋画の俳優のように首をすくめて言った。それが結構、サマになっている。だが相変わらず人をコケにした態度が気に喰わない。いつもそうだ。毎回こう言われる度に縁を切りたいと思う。けれど絵を描く才能以外持ち合わせていない俺にとって美術部は必要だし、ラ

イバルであり、話し仲間であるこいつの存在もいなくては困る。離れたくても離れられない。余計に嫌なヤツだ。確かに俺と三雲は赤い糸に結ばれているかもしれない。けれどそれは小指でなくて首にだ。お互いがお互いの首を絞めあって遊んでいる。

「雨宮、怖い顔すんなよ。つか、見てみろよ。この駅構内の人たちをさ。百年経てば揃いも揃ってみんな死体。でも姿を見せず静かにどこかで灰になる。だからみんな死なんて非現実のものにしか見えない。限りなく避けようも無いリアルなのにさ。つまり『カラスの死体』だよ。なんかさぁ。みんな本音で話せばいいのになぁ。ウソばっか言ってるから真実が見えなくなるんだよ。カラスの死体が珍しいなんて非常識極まりない。例えばキミがゲイだとしても、ボクは……」

「だから何の話だよ！」

声を荒げた俺が面白かったのか今度は本当に笑いながら「ゴメン、ゴメン。なんつーか、そろそろ時間だわ。じゃ！」と言って三雲は帰りの電車に乗るべく走り去っていった。

ふと時計を見ると俺が乗るはずだった帰りの電車の時間はもう過ぎていた。

仕方なしに俺は駅で二十分ベンチに座り、一人で次の電車を待った。

三雲のせいで、水溜まりに落ちて濡れた靴がやけに冷たく感じられ、ムカついた。

憂鬱なまま電車に揺られ、家に帰るとまだ母親も父親も帰って来ていなかった。

まず靴下を洗濯カゴに入れて晩御飯の用意を始めた。

適当に冷蔵庫を中を見ているうちに、温かいうどんが食べたくなり、うどんを作った。

そのうどんを食べながらテレビをつける。

適当につけたテレビはニュース番組をやっていた。ニュースは奪った、倒れた、死んだ、殺した、……などなど、今日も飽きずにこの世のネガティブを分かりやすく俺に報告していた。嫌気がさして、お笑い番組に切り替えると今度は笑ってばかり、その笑いは決して幸せな笑いじゃない。笑うために笑っているだけ、ポジティブとは程遠い。液晶一枚隔てた世界はやっぱり、どこかリアルではない。

うどんを食べ終わるとテレビを消して、風呂に入って暖まったところでリアルすぎるくらいリアルで気の重くなる宿題をテキトーにこなした。

「ただいま」と玄関で母親の声が聞こえ、俺はそれに応える。

「晩御飯は食べたからいいよ」

「そう、今日は遅くなってごめんね」

いつものことだろ？

俺はノートにもう一度カラスの死体を描いた。

結局、うまくいかず、気分転換に雑誌のモデルを模写した後、ベッドに入った。

ベッドに入って電気を消す。いつの間にか雨は止んでおり、しっとりとした雨上がりの空気があたりを暗く包んでいた。目をつむると三雲にゲイと呼ばれたことを思い出し、少しムカついた。

ゲイ？ただ俺が描いた絵が性的じゃなかっただけだろう？

性的に描けばいいのか？

あの時の宮坂のわずかに収縮を繰り返す胸をリアルに描けばいいんだろう？

それとも唇を柔らかく艶かしく？

玄関で物音がした。

父親が帰ってきたのだろう。母親と何か話しているが、俺には関係のないことだ。
宮坂のことを思いながら毛布にくるまりマスターベーションをしようとした。

あの美術室で椅子に座る宮坂の後ろに回り「おまえは今日はモデルなんだから動くなよ」耳にささやく。そしてわずかに震える宮坂の首元に優しくキスをする。宮坂は切なく甘い吐息が口から漏らす。宮坂は自分から漏れた甘い声が恥ずかしいのか顔を赤くしてうつむく。俺はそんな宮坂の声をもっと聞きたくて制服ごしに宮坂の胸を揉む。宮坂は「いや」といって、俺の手に触れるがその手は添えられるだけで嫌がる気配はない。俺はゆくりシャツのボタンを外し、ブラの中へ手を滑り込ませ宮坂の小ぶりで可愛らしい胸を愛撫する。宮坂は息を弾ませ、吐息のような声を漏らし俺の愛撫に応えている。しっとりと汗ばんだ宮坂の肌を楽しみながら、俺はもう片方の手を宮坂の太ももの柔肌の感触を味わうように這わせる。バスケをしていただけあって柔らかさの中に硬さを感じる太ももの感覚を楽しみながら、ゆっくりとスカートの中に滑り込ませる。そこはもうフライパンの上のバターのようにとろけている。俺を迎え入れるのに充分な状態だ。そこを指で触る。美術室に淫らな水音が響く。宮坂は切ない声をあげながら俺の指の動きに合わせて腰を動かす……。

そんな状況を思いながらペニスをさすっていたが、結局うまくいかなかった。

○

「あ、アレ、OKってことだから」

三限目と四限目の間の休み時間の終わりに今まで見たことの無いような親しみ深げな笑顔の宮坂に唐突に言われた。一瞬、何のことか分からなかったが、チャイムが鳴り終わって社会科の先生が入ってきたところで俺が宮坂に告白したのを思い出した。そのことを忘れていた自分はやはり気が無いのか？それとも薄情なのか？

この了解で、この学生生活がバラ色になる人もいるんだ、と思うと「確かにそういうこともあるかもしれない」と思う。けど今の自分は明らかに覚めているし、心の中をバラ色にできる要素もない。

はっきり「実は気が無いけど、ついつい三雲にの話に乗せられて言ってしまった」と言った方がいいのか？いや、良くないだろ？告白した身で何を言っているんだ、と思う。

とりあえずなりゆきに任せよう。なりゆき任せなら得意だ。

クラスでも空気のように一生徒として流れに身を任せ、自分勝手に動いていながらも何のトラブルもなく学生生活をしている。ようは機転を利かせる時に利かせればいいのだ。いつものようにさらりとやり過ごそう。

授業は滞りなく終わり、いつものように放課後になる。

この決まりきった流れに少しいつもと違う流れが出来ていた。

「ほらよ。部長！」と三雲が美術室の鍵を投げて渡し「プライベートを楽しんでな」と言った。

「おまえも部活に来ればいいんじゃね？風邪でもひいたん？」

「いやいや、そんな出来立てほやほやのカップルの間に入っちゃまずいな、と思ってさ。ホラ、ボク、紳士だし」

「じゃあ、おまえはどうすんだよ？」

「腐敗してきたカラスの死体のお相手。あ、あと明日、藤崎さんが来るって言ってたから明日以降は部活に来るから、宮坂と二人っき

りの部活は今日までだよ。じゃあな！」とだけ言って去っていった。ちなみに藤崎さんは部活のＯＢで今は美大に通っている。たまに暇を見て後輩である俺たちを見に来てくれていた。

それにしても腐敗したカラスの死体？あの時間が止まったように動かなくなっただけのカラスが腐敗しているんだと思うとなんだか不思議だった。そうだ。腐敗するんだ。三雲の言うとおり人も死ねば腐敗する。土に返るというけど、その土に返る前の不気味な一工程。不気味な？自然なことなのに人はそれを覆い隠している。

美術室でスケッチブックを開いて、昨日描いた宮坂のデッサンを眺めながら、そんなことを考えていると美術室の戸をノックする音が聞こえた。

俺は「入っていいよ」と言うと昨日よりやや気軽に宮坂が入ってきた。

「三雲君の姿が見えないけど、学校には来ていたよね？部活休んだん？風邪？」

「そんなところ。でも明日から来るってさ」

俺は適当に誤魔化し、宮坂をモデルにデッサンを始めた。

昨日描いたものとはまた違うものだ。ただ宮坂の身体の面や立体構造を意識して形をとりベースを乗せ、描き込んでゆく。

藤崎先輩の話ではデッサンの練習は三時間から五時間で描き上げるのが理想らしい。この辺、俺はどうかと思う。単純に完成すれば早かろうが遅かろうがいいじゃないか。けれどもしかしたら藤崎先輩は美大の受験を前提に話しているのかもしれない。俺と三雲の実力をかっていることは確かだ。しかし俺は美大なんて行く気もない。そして三雲はＷ大か映画専門学校だったか。後輩に期待してくれているのに申し訳ないがまるっきり気の無い二人に期待されても困る。

人物をモデルに描くのは久々だったので、少し気合を入れるために制限時間を自分の中で設けて描いた。時間は一時間半、俺の本気の集中力の切れるまでだ。せっかくの機会だ。惰性で描いてもしかたない。その制限時間内でできるところまでを描こうとスケッチブックに向かう。描き始めると周囲の全ては見えず宮坂の姿とスケッチブックだけの世界になった。そうなると一時間半なんて一瞬だ。その一瞬が終わると急に周囲が見え始め、どっと疲れが出てきた。とりあえずできたところまでを宮坂に見せると宮坂は本当に嬉しそうに「すごい！」と言ってくれた。
その一言で疲労感が心地の良いものに変わる。

そして俺の絵を見ていた宮坂が言った。
「それにしても雨宮さ。日曜ヒマ？」
「ヒマだけど」
「映画でも行かない？」
「ああ、いいよ」
「何が観たい？」
「行ってから決めてもいいんじゃね？」
何を思ったのか宮坂は真剣な顔で俺の顔をしばらく覗き込んだ後「雨宮って、ホントは私のことをどうとも思ってないよね」と言った。

俺の言葉が悪かったのか。俺の顔に何かそれらしき兆候が現れていたのか。それとも女は男より鋭敏に恋愛感情を読み取る能力が備わっているのだろうか。もののズバリ本心を言い当てられて、俺は「そうかもね」と言うしかなかった。

意外にも宮坂は「まぁ、いいんだけどさ」と別に気にもなく言った。そして「でも日曜、映画には一緒に行って欲しいし、学校内だけでも仲良くしない？」と言った。

「どうして？」と言いかけたところに宮坂は自分のケータイを俺に渡した。
そのケータイには昨日の日付の受信メールが映し出されていた。

Ｆｒｏｍ：白石香織
ｓｕｂｊｅｃｔ：こんにちは

今日はカラオケに一緒に来てくれてありがとう。すごく楽しかったです。
話は変わりますが、以前、加奈がアキレス腱を切った時、真っ先に私に相談してきてくれたことがありましたね。
前に話したとおり私も中学生の時、陸上部で走り込みの時にアキレス腱を切ってからというもの運動部とは無縁になっていたので加奈の境遇は分かります。
周囲を取り巻く環境が微妙に違ってきたり、今までの自分のアイディンティティが崩壊して辛いですよね。
教室内で今までと同じように明るく振舞っている加奈を見ると私の胸の内に軽い痛みを感じます。
私には加奈の辛さが分かります。
その辛さは時が癒してくれるでしょう。
けれど同じ痛みを知るもの同士で分かち合うこともできると思います。
実は高校に入ってからというものずっと加奈のことを見ていました。
多分、こういうことを言うとひかれるかもしれません。
けれど私たちは高校二年です。お互いの進路も違うと思う。
つまりあと一年で離れ離れになる身ですね。
私はこのままで終わらせたくないんです。
私、加奈のことが好きです。
あの晩、アキレス腱のことに関して私に電話をしてくれ、その心情

の全てを話してくれました。
もしかしたらと、自惚れていいですか？
加奈も私のことを私同様に思っていると思う。
間違いかもしれません。もし間違いでなかったら、今すぐ会いたいのです。
〇〇駅で待っています。

ーーＥＮＤーー

俺は読み終わると軽く平衡感覚を失った。
ごっそりとリアルな感覚が遠のき、言葉がまるで口から出てこなかった。
多分、かなり間の抜けた顔をしていたに違いない。
そんな俺の顔を見ながら、宮坂は困ったような笑ったような顔で言った。

「トモダチ多いとニンゲン関係が大変なんすよ」

無責任な情熱

「トモダチ多いとニンゲン関係が大変なんすよ。
まったくさぁ。最初このメールもらって軽くめまい起こったよ。ホントどうしようかと思ってね。で、無視してなかったことにしようかと思ったんだけどね。昨日モデルやっている時にホラ、電話鳴ったじゃん。アレさ香織なんだよね。で、こりゃ一言言っておいた方がいいな、って駅に行ったんよ。そしたら、昨日雨降っていたじゃん。けど香織、傘持ってこなかったみたいで。でも駅の入り口で立って待ってんの。いくらなんでもねぇ。駅の中ででも待ってりゃいいのにさ。髪も遠目で分かるくらい濡れちゃってて。なんかかわいそうで、そんなに私を思ってくれてもねぇ。会ってもどうせ断るだけなんだけどさ、でもどう言おうか迷って、結局声かけるの止めてさ。でも駅の入り口に陣取られて電車で帰れないし、電車で帰るの止めてバスで帰ってさ。でもバスだとバス停から家までちょっと遠くて大変なんすよ。あ、そんなの関係ないか。まぁ、なんといいますか……」

宮坂の話を聞きながら白石香織がどういう人間だったか思い出そうとした。もともとクラスで誰が何をしているかとか、誰がどういう交友関係を築いているかとか、特に興味の無い俺にとっては特に繋がりのある人間以外は顔と名前が一致しないことがしばしばあった。当然、接点のない白石香織の顔をなかなか思い出せなかったが、宮坂の話の後半でなんとなく顔を思い出した。艶のあるロングヘアが印象的な明るい雰囲気の女子だ。いつも数人の女子とまとまって話をしていた。そしてその会話の中心に彼女は存在しているようだった。よくよく考えればその白石の友人のほとんどは帰宅部だったような気もする。それが宮坂に告白した？普段の学校生活からは全く考えられないことだった。

白石は宮坂に告白したということは白石は女が好き。いわゆる同性愛者と呼ばれる人なのだろうか。
同性愛者には失礼な話かもしれないが、俺にとっては同性愛者なんてものは、正直、テレビの中の話で現実に存在しているとは思ってもみなかった。けれどこうやって実際にメールを見ると、その非現実な存在が実在して、しかもそれが身近にいたことに驚く。

彼女は普段、その性癖（と、でもいえばいいか？）を隠して一部の女子の中心的な存在として生活していた。もし同性愛者ということがバレたら周囲はどう反応するだろう。よく分からないが、普通とは違う感覚を持つ人間だ。今まで友人だった連中は距離を置くに違いない。今、こうやって距離を置きたがっている宮坂のように。そして周囲から弾かれ、立場がなくなれば、今の学生生活が友人の手によって息苦しいものに変わるのだろうか。
俺が白石のことを考えていると宮坂が「ねぇ、聞いてる？」と不機嫌そうな顔をして言ってきた。

「聞いてるよ。好きなら付き合えばいいし、嫌なら断ればいい」
「雨宮のそういうとこ、大好き」
宮坂は全然、大好きじゃなさそうに、むしろ逆のニュアンスを漂わせながら言った。

「そもそも、付き合えばいいって、私にそういう趣味ないから。つか、なんというかさ。普通に断ればいいだけのことかもしんないけど。そうなると香織の秘密を知るのは多分、自分だけだし。そうするとなんか、香織に嫌われそうじゃん。そうなると帰宅部連中にも煙たがられそうだし。嫌われるのはイヤなんだよね。でもまぁ好かれすぎるのもアレだけど……。とにかく付かず離れずできたいんだよね。O型と間違われるB型といたしましては。波風立てず、静か

に湖を滑るように泳ぐ水鳥みたいに優雅に学生生活をおくって、あとは立つ鳥後を濁さずのコトワザどおりに、なんのしこりもなく卒業したいんですよ。それにさ、見てよ」

そう言ってまたケータイを操作して俺に渡した。

受信メールの日付はまた昨日だった。受信した時間は十時になっていた。

Ｆｒｏｍ：白石香織

ｓｕｂｊｅｃｔ：こんにちは

今日は来てくれませんでしたね。

私は雨の中ずっと駅前で待っていました。

駅を行きかう人並みの中から加奈が現れ、私の目の前に立ってくれる姿を想像しただけでドキドキしていました。

けれどそれは幻想に終わりました。来てくれなかったということは、つまり私のことを嫌っているのでしょうか？

女の子同士ということで少し戸惑っているとか？

それとも別の理由で来れなかったんでしょうか？

例えば駅は通学路でうちの学校の人も見ているから嫌だったとか？

絶対理由があるはずです。

でももしかしたらと一抹の不安もあります。

ただ私が勘違いしているだけなのでしょうか？

私は加奈が私を嫌っていないと思いたい。

この思いは私たち共通のものだと信じたい。

今だって必死の思いで加奈に私の気持ちを打ち明けています。

……けれど、もし加奈がそうでなければはっきりと言って下さい。

素直にあきらめます。

そもそも嫌われているのなら、こんなメール迷惑ですよね。

でもそうじゃない、と祈りながら、このメールを送ります。

――ＥＮＤ――

「末永くお幸せに……俺はおとなしく身を引くよ」

「だから私にそんな趣味ないから！しかもさ。これ重くない？断ったら恨まれそうで……それで、できるだけ恨まれそうにないように返信したけど」

「何て？」

俺の言葉に宮坂は俺から目をそらして下を見ながら「いや、実はもう付き合っている人がいますって」と言った。確かに告白（のようなもの）をした後だったし、仕方ないだろう。けれど、その言葉は白石の告白をかわすための方便にしか感じられない。俺も宮坂に特別な感情を抱いているわけじゃないが、一方で宮坂も俺に特別な感情を抱いているわけでもない。この妙な利害関係で付き合わなくてはならないのか、と思うと少しゲンナリする。

昨日、宮坂が仮面を付けて、自分を隠しているという話をしていたが、俺も妙なことに巻き込まれて無理矢理、顔にまるっきり合わない仮面を付けられたような感じになり、なんだか気が重くなって思わず口からため息が漏れた。

「だって、まぁ……ちょうどいいじゃん。これからと日曜よろしく！」

宮坂は俺の気持ちを知ってか知らずか、上目使いでにっこりと笑って、やたら元気のいい声で言った。一瞬、目にゴミでも入ったのか、片目をつむり顔を歪ませた。もしかしたら本人はとびっきり可愛く

にウィンクをしたつもりかもしれない。
そして宮坂は立ち上がりうーん、と背を伸ばした。

「モデルって疲れるね。じゃあ、一緒に帰りますか」

仮の彼氏として俺は宮坂と一緒に帰ることになった。
それにしても白石だ。同性愛者だったのを隠していた。どういう思いで学生生活をしていたのだろう。宮坂に恋をして、でも近づけず遠くの方で彼女の姿を見て思い続けていたのだろうか。まるで地球の周囲を一定の距離を保ちながら、片時も目をそらさない人工衛星のように。

下校中、そんなことを考えながら宮坂と肩を並べ歩いていた。
俺が白石のことを考えている一方、宮坂は学校にいる時と変わらず俺の隣でしゃべり続けていた。
話題はアキレス腱が切れた時、身体の中で弾けるような音がした話から、また白石とその仲間連中の話、そして異性不純交際の校則があって、なぜ同性不純交際がないのか？同性なら絶対子供ができないから学校は許しているのか？責任が取れないハイティーンの不条理な宿命を語ったかと思うと、突然、夏休みの合宿でバスケ仲間とビールを飲んだ話……。
それにしても宮坂はよくしゃべる。ボクシングのシャドーのように軽快かつリズミカルに、哀れな歩兵をなぎ倒すマシンガンのように矢継ぎ早に容赦なく。そこに目的はない。ただ『話す』という行為が最重要で論点や結論はどこにもない。俺はそれに対して適当に会話を合わせる。もしくは適当に相槌をいれる。

時々宮坂を話をしていると、ひょっとしたら宮坂の会話に相手は要らないのではないのか、と思ってしまう。人間でなくてもいいのだ。まずＳＦに出てくるアンドロイドのような話すことのできる機械に

適当な相槌を何種類か用意させる（俺の見立てでは最低三つあれば十分だと思う）それを宮坂の話に合わせて反応するようにしておく。俺の予想ではそれで宮坂は三時間は余裕で話し続けるだろう。そうは言ってもその話はどこか人を惹きつける何かがあった。話は他愛のないものかもしれないが。

こうやって肩を並べて話しながら歩いていると宮坂の歩き方がどこかぎこちないところがあった。「まだ痛むのか？」と俺が聞いたら「ううん。あんまり片足をかばって歩いていたから、身体が普通の歩き方を忘れちゃったみたい。そのうち治るでしょ」と気にかけてくれたのが嬉しかったのか笑顔で答えた。
その後、俺が話の流れを切ってしまったからか、しばらく沈黙が続いた。
話題を探そうにも俺の頭の中には会話を楽しむような気の利いた話題はなかった。
仕方ないので俺は少し引っかかっていたことがあったので宮坂に聞いた。

「あとさ」
「何？」
「ひょっとして三雲と宮坂ってグル？」
「グルって？」
宮坂は勉強してなかった科目のテストがいきなり目の前に配られたような顔をして言った。
「いや、三雲が宮坂が俺に気があるから……」
さすがに「想い出作りにやってみれば？」とは言えない。
「……告白してみたらって言ってたからさ。なんとなく繋がりがあったんかな、と」
「いやいやいや、あの人とは全然繋がりないし、それにそんな、ねぇ。気があるってただ教室で仲良くしてるだけじゃん、うちら」

「周りからみたらそう見えたんかな？」
「そう見る人もいたかもね」

その後、駅へと歩く途中、また延々と宮坂の話し続けた。
ころころとめまぐるしく話題が変わる。クラスで誰と誰がくっついているののかとか、ドラマの恋愛とリアルの恋愛の違い云々の話から、宮坂の好きなバスケ漫画の話になり、いきなり何の脈絡もなく俺に「ズバリ、雨宮にとって美術部って何？というか『絵を描くこと』ってどういうこと？」と聞いてきた。

「絵を描くこと？」
オウム返しに俺はその言葉を返した。もしくは反芻に近いかもしれない。『絵を描くこと』が当たり前すぎた自分にとって、その言葉がうまく飲み込めなかったのだ。そんな俺のきょとんとした横顔を宮坂が見ている。ゆっくりとその言葉は俺の中に入っていった。

「そう、なんで絵を描くのか？理由が知りたいなぁ」
「なんでだろうな。単純に好きだからっていうのもあるし、絵を見るのが好きだったっていうのもある」
「絵のどういうところが好きなの？」
「見てるだけで心揺さ振られる絵。感動できるっていうか、そもそも綺麗なものって単純に惹かれるし」
「雨宮はそういうの描きたいんだ」
「そうかも。共感されたいっていうか。感動にも色々あるけど、俺の感じたものを同じように感じて欲しいというか。まぁ俺はご覧の通り自己中心的な人間だから共感って部分で許容範囲は狭いと思うんだ。でもその狭い許容範囲の中で俺と同じように感じてくれる人がいると思う。結局、俺が絵を描くのは俺と同じ人間に共感して欲しいのかも。それを表現するレベルも欲しいな。正直、写生やデッサンだけじゃなくてもっと自由に描きたいんだ……」

ゆっくりと『絵を描くこと』という意義を自問してみて、こうやって自分の考えを初めて口に出して気づいた。自由に描きたい、そう俺は思っていたんだ。写生やデッサンではなく。その時、頭の中にカラスの死体とリノリウムに横たわる宮坂。そしていつかどこかで見た初老の男の彫刻の写真が横切った。
白い床の上に横たわる初老の男の死体を模したシリコン製の精密な人形『デッド・ダッド』そんな名前。確かその彫刻の髪の毛は作者自身の髪の毛を植えたはずだ。

いつ見たのだろう。今まで忘れていたが急に思い出した。今まではそんなに興味を惹かれるものではなかったのだろう。今、こうやって自分の考えを宮坂の前で言ってみて初めて自分の気持ちに気づいた。そしてその気持ちによって記憶の奥底から、カラスの死体とリノリウムの床に横たわる宮坂に影響されて、ゆっくりと浮上してきたのだ。
それが誰の作品でどういう意味で作られたのか思い出せない。記憶の糸をいくら力一杯たぐり寄せても、何かに引っかかったままでこちらには来もしない。

俺の話を聞いて宮坂は「やっぱ雨宮って熱いね。私もそういうものあったんだけどな。バスケだけどね。燃えてたんだよね。だけど怪我してから何にもなくなっちゃった。あの時のあの熱い思いって何だったんだろうね？もう、どこにもないや」と言った。そして「そういえば雨宮って卒業したらどうすんの？やっぱ美大とかそっち系の専門学校？」と聞いていた。

「いや、地元の短大」
「そう、なんか意外。そっち系、目指せばいいのに」
「絵を描いて食べていけるほど、そんなに世の中、甘くねぇし」

「何か、借りもんだよね、その言葉。言い換えればさ、世の中、甘けりゃ、自由に絵を描いて食べていきたいです！ってことでしょ？
まだ高校二年秋。まだ間に合うよ、雨宮」
宮坂の無責任で妙に熱のこもった声と期待感。
思わず目を背けたくなる。

限定された世界で

「自由に絵を描きたい」
宮坂から「絵を描くことってどういうこと？」と聞かれて、自分の口から出た言葉。
家へ帰る途中、電車のつり革につかまりながら、この思いはどこからきたのか考えていた。

そもそも俺は小さいときからよく絵を描いていたと思う。鉛筆やクレヨン、絵の具、色鉛筆……他のおもちゃはすぐに飽きてしまうがこの遊び道具はどこまでいっても飽きがこなかった。親に褒められたこともあったかもしれない。それとも自分の性分もあるかもしれない。けれどそれだけ時間をもてあましていた、ということだ。

親は共働きだった。そもそも父親の稼ぎだけではうちはやっていけなかった。
共に帰ってくるのは決まって暗くなってからだ。しばしば夜遅くに帰ってくることも少なくなかったと思う。テレビは好きじゃなかった。それはどこか別の世界の話を俺に見せてくれる道具ではあったが、どこか薄っぺらく感じた。どう薄っぺらいのか、うまく説明できないが、所詮、他人事なのだ。テレビは俺の孤独を癒してくれるモノではなかった。それよりも俺の孤独な時間を忘れさせてくれたのは父親の持っていた写真集だったり、アート関係の画集だった。その中にはマニアックなものや、専門的な価値のあるものも含まれていた。どうして父親がそんなものを持っていたのか分からない。昔、そういう道へ進みたかったのかも知れない。俺の疑問に対して父親はいつも言葉を濁していた。触れて欲しくない過去なのかもしれない。そしてその触れて欲しくない過去は俺自身も含まれているような気もしていた。

つまりは夢だけでは妻子を食べさせていけない、ということだ。

俺は小学校の頃、そんな雰囲気に息苦しさを感じていた。

父親は俺の絵を見て褒めてくれる。アドバイスもしてくれる。絵に対しての人並み以上の情熱を感じることもあった。けれど自分で手本を見せてはくれなかった（なんとなくだが父親は今の俺より高いレベルの技術を持っていると思う）。そしていつも絵を評価した後に「絵だけで食べていけるほど世の中、甘くない」「絵もほどほどにな」「趣味をもつのはいいことだ」……それらの言葉は俺の心を軽く傷つける。傷つけるといっても軽いひっかき傷のような傷だ。肌に跡がつくがすぐ治るし痛みを感じることもない。だがその言葉の中にある気持ちをおぼろげながら知ったとき痛みを感じた。

「家出して、ここではないどこかへ行こう」

そう思った。単純な反抗期だ。親の言うことは全て気に入らない。家族も気に入らない。そう思う自分も気に入らなければ、そう思わせるヤツらもまた気に入らない。ぐるぐると心が負の連鎖を始める。

中学に入ったばかりの頃だったと思う。小遣いを少しずつ貯め始めた。月々の小遣いや晩御飯を買うためにもらったお金を節約して貯めた（おかげで少し料理を作れるようになった）。そしてある程度お金が貯まったとき、俺は学校が終わると貯めたお金を持って、家に向かう電車とはまったく別方向の電車に乗った。それがどこに行くのか分からない。けれどその電車が連れて行ってくれるところは今よりはるかにマシな場所だろう、と思えたのだ。

電車に揺られ、車窓から馴染みのある風景から見たことも無い町並みに変わるのを眺めていた。

空は夕日なり色とりどりの町並みを橙色に染め、空は夕日の赤と夕

闇の青とが交じり合って、やがてまるっきりの夜になったとき、俺は電車を降りた。そこがどこか分からなかった。行き交う人の顔を見ても誰一人、知っている顔はない。だけどどこか知っている人の面影を見ようとしている自分がいた。単純に心細かった。そして「帰ろう」と思った。どう考えてもポケットの中の財布に入った金額では自分ひとりで暮らせるわけはない。誰にも頼ることはできない。ここが俺の限界なんだ、とあきらめた。駅員に帰りの電車は何線に乗ったらいいのか聞き、家へ帰った。

家に帰った頃、あたりは街灯の明かりが道を照らしているだけであとは真っ暗だった。

そして家のドアを開けても家の中はまるで廃墟のように暗く、静かだった。そう、まだ親も帰っていなかったのだ。俺の家出はこうして終わった。

俺は自分のための晩御飯を作って食べた。そして自分のために風呂をわかし風呂に入る。

それでも両親はまだ帰ってこなかった。もうしばらくしたら帰ってくるのだろう。そしてこういうのだ。「ただいま。今日は学校はどんなだった？」ありきたりな言葉を俺にかける。それは俺に興味があってかける言葉なのだろうか。ただいつも同じように繰り返される言葉。その言葉から何を聞き出そうとしているのか。多分、両親は俺が彼らと生活することに息苦しさを感じ家出をしたことを知ることはないだろう。そして心細さのあまり逃げ帰ってしまったことも。俺は中途半端に家族に恵まれ、中途半端に家族に恵まれていない。

俺は静まり返った部屋で絵を描いた。

電車の車窓から見た夕暮れに染まる町並み、上空から藍色の夜の帳が下りてくる。人々の顔は一日の疲れからか全て無表情に存在して

いた。それらを描いているうちに嫌になった。俺が見たものはこんなモノじゃなかった。もっと違ったモノだった。俺は鉛筆を取り出し、その絵の上から黒々と両親を描いた。そして胸に銃弾を撃ち込んで殺してやった。

家出を計画し、電車に乗り、町を出て、隣町へ行き、県境まで行っても自由になれなかった俺が縦３６４×横２５７?、Ｂ４サイズの絵の中で限りなく自由になれた。
俺はその日以来、親に絵を見せていない。

○

家に帰って、宮坂に絵を描くことについて語っていたときに、ふと脳裏によぎった『デッド・ダッド』について調べようと父親の本棚を調べたが、それらしき作品を見つけることはできなかった。

俺は冷蔵庫の中を見て、傷んだトマトとぐにゃぐにゃになったキュウリ、そしてレタス（これは奇跡的に新鮮だった）を切り刻み、ベーコンと一緒にパンの上にのせ、マスタードをかけて、サンドイッチを作る。そしてインスタントもののコーンポタージュと一緒に食べながら、父親のコレクションのひとつのキキ・スミスの画集を眺めていた。そこには六羽のカラスの素描が描かれていた。どれも羽をたたみ、歪に死後硬直しているように見える。その作品の脇に説明と彼女へのインタビューが載っていた。

「（前略）とにかく動物は私の作品の中では、自然な発展の線上にあると思っているの。最初に解剖図の素描をしたでしょう。分子や細胞を描いた。それからリンパ腺や消化器などの体内組織をとりあ

げて、次に皮膚、そうして全体像とさまざまな宇宙論に基づく彫刻を手がけた。そして、宇宙論を経て、動物にたどりついた（後略）」

面白い。三雲と同じ発想だ。細部を精密に描くことに重点を置いている。

ただ作品の意味合いに関してベクトルが違うが。

そうだ、そもそも三雲がどうしてカラスの死体に興味を持ったのか。そして俺も何故、こんなにもカラスの死体に興味があるのか。それは死について知ろうとしているのではないだろうか。だから腐敗するから良いという発想が出てくる。いや、描くことで死以外にも何か知りえる可能性があると思う。だから完璧な死体を描きたいのだ。キキ・スミスのカラスの絵とはやはりベクトルが違う。

生と死といえばダミアン・ハーストだろう。

輪切りや腐乱した動物の死体を放置した作品を作った。その残酷さから母国イギリス中に悪名を轟かせたが、イギリス代表として'９３年の国際美術展覧会ヴェネツィア・ビエンナーレに縦に真っ二つに切断された牛と子牛をホルマリン漬けにしたエキセントリックな作品を出展してターナー賞を受賞し、イギリスの最重要の芸術家にまでなった。

三雲はこれに近いだろう。

いや、それをいうなら俺もかもしれないが。

キキ・スミスの画集を本棚に戻しながら考えていた。

これら芸術家は見てもらうことを前提としている。それに比べ、俺たちはただお互いの絵の比べ合いだ。

大衆を相手にするのと、ただ一人、ライバルに差をつけたいだけではレベルが違う。いや、ベクトル自体違うことだ。人に見られることを前提としていない芸術は芸術ですらないかもしれない。いや、

よく言えば、名声を目指すわけでもなく既成の芸術に一切とらわれることなく表現してる「アール・ブリュット（生の芸術）」といえるか？だが悪く言えば「品の無い落書き」だ。

そんなときケータイのメール着信音が鳴った。
メールをチェックしてみると、宮坂からだった。
「今、なにしてる？」と絵文字入りで送られていた。
返信するのも面倒くさいので無視しようかと思っが、今は彼氏役だ。
「サンドイッチを作って食べながら、キキ・スミスの画集を見ていた」と送った。
するとすぐに返信がやってきた。それに俺は返信する。
正直、面倒くさい。絵を描きたいし、もっと調べたいものもある。
宮坂が本当に恋人なら楽しく過ごせるのだろうか。そんなことを疑問に思っている俺より白石の方が宮坂に向いているのではないだろうかと、素直に思ってしまう。

ゴミは当然、ゴミ箱へ

今、悩んでいることが二つある。
一つは部活のこと。もう一つは恋愛。こう書くと非常に高校生らしい悩みだ。
だが部活の方はいかにカラスの死体を上手く描くかだったし、恋愛は同性愛者に告白された女子の逃げ道として存在していた。おおよそ普通の高校生らしい悩みとは程遠い。

まず恋愛について語ろうか。語ると言ってもグチに近いかも知れないが。
恋愛といったらクラスの隅で誰と誰が付き合っていて、誰それが好きでどう告白しようかとか、……どうのこうのと、何がそんなに楽しいのか、はしゃぎながら仲間と語り合う。（主に女子だろうが。男子なら人目を避けて話す。理由は単純、恋愛談義なんぞ男らしくないから。少なくとも俺のクラスはそうだ）そして仲間内の話だけではなく、行動に移したヤツらが、フラれたり、三角関係になったり、片思いになったりして仲間の笑い話のネタになったりするのが主だ。しかし、うまくいけば付き合うことになるヤツもいる。両思いになって恋愛成就すれば、周囲から羨望のまなざしを受けることになる。俺もそういう関係になってみたいと望んでいた。けれど恋愛というものどういうものかよく分からない俺だ。恋愛成就の何がどういいのか分からない。俺はただ、周りから羨望のまなざしが欲しいだけかもしれないが、とりあえず。

それがどういうワケか、こうやって宮坂と仮の恋人として付き合うことになった。けれど今の宮坂との関係は同性愛者から逃れるための方便に近い。そりゃ、俺も少しは宮坂のことは気になっていた。仲の良い異性だったこともある。そんなところに三雲のヤツに「宮

坂のヤツ、キミに気があるぜ」と言われれば、なんとなくそんな気にもなってきてしまい、つい、ウカウカと告白のようなものまでしてしまった。けれど宮坂だって俺のことを悪くは思ってないはずだ。（俺の気のせいではなければ）常に俺といる時、そういう雰囲気を出していたように思えた。それは手ごたえのない、おぼろげな雰囲気だったが。三雲の言葉もあるが、告白めいたことをしてしまった理由の一端にその雰囲気が何なのかはっきりさせたかったのもある。

けれども、雰囲気をはっきりさせるどころか、逆に告白してしまったことによってワケの分からない状況になりつつある。もし告白をしなかったら、このまま俺と宮坂の仲は先に進まず、後に引かず、仲の良い異性という関係で終わっていたのかもしれない。それが、あの一言のせいでこんなことになっている。

結局、俺自身はどうしたかったのかと言えば、今はどう答えていいのか自分でもよく分からない。昨日の気持ちと今日の気持ちは違う。もしかしたら明日はもっと違うかもしれない。「違う」と言っても、大きくは違わない。それは微妙なニュアンスの問題だ。言いたいことは「人の心情なんて外的な刺激で常に変化する。秋の空より不安定かもしれない。つまり人間は感情で動き回る生き物。理論的にだけでは生きれない」ということ。

日ごとに変わる俺の心情だが、一つはっきりした答えを出した。いや、もしかしたら答えにはならないかもしれないが、三雲からもらった穴あきコンドームは下校時にコンビニのゴミ箱に捨てた。使用しない物はゴミだ。しかも壊されて本来の目的を果たせない物はゴミ以外のナニモノでもない。ゴミは当然、ゴミ箱へ。

いまだ俺は恋愛なんて分からない。恋愛どころか、俺自身の感情もままならない。人間の感情も分からない。三雲が何故、カラスの死

体を描こうと誘ったのか、何故、俺に告白させたのか、そして宮坂の仮面とか本心とか、……そういった人間関係がよく分からないまま振り回されている。

そうそう、芸術というのはその人間関係の息苦しさにくつろぎを与えるものだ、と国語の教科書に出てきた夏目漱石の『草枕』に書いてあったような気がする。

人間関係が嫌になる。人間関係が嫌になって、人のいないところに行きたくなる。けれど人がいなところは人でなしの国だ。そこはさらにここより住みにくい。結局、今のこの場所に住むしかなく、そこにひと時のくつろぎを与えるべく、歌が生まれ、画を描く使命が芸術家に下る。芸術とは人の世の息苦しさの束の間のくつろぎを豊かにするものだ。

うろ覚えな文章だ。かなり違っていると思うが大筋では間違いじゃないだろう。

つまり我が美術部はその息苦しい世間の束の間のくつろぎの豊かさをもたらす代表だ。絵は見る人を豊かにする。人間関係の疲労をしばし忘れさせ、くつろぎを与えてくれる。もちろん描く側も上手く描ければ豊かになるだろう。

しかしどれほどの人間がカラスの死体を見て豊かになれるのか。

俺の知るところでは二人。

俺と三雲。

人の世のくつろぎの中に死体を転がし、人の世の息苦しさに束の間のくつろぎを得る、人でなし二人組み。そして、どちらがくつろぎの中にうまく死体を転がせるのか比べ合う。

ままならない人間関係にくつろぎを！

カラスの死体を描きながら、ワケの分からない恋愛をやり過ごせ。

○

藤崎先輩が部活にやってきた。
我が高校を卒業した美大生で暇を見ては部活に顔を出し、俺たちの絵を見てくれてる。
この人のお陰で美術部は成り立っていた。顧問の先生はいないに等しい。というか、顧問は藤崎先輩に任せっきりで常に部員数が多い文芸部の方に行っている。まぁいても俺と三雲の男二人が常に何かに向かって黙って何かを描いているのを見ていても面白くないのだろう。
そしてコンクールのほとんども顧問を通してではなく何故か藤崎先輩が持ってきていた。

美術のテクニック指導にコンクールの提供。
実質、顧問は藤崎先輩と言ってもいいかもしれない。例え、月に一回しか来なくても。ミラノコレクションを彷彿とさせる前衛的なファッションを地方都市の片隅で堂々と着れるセンスをしていても。

今回は黒を基調としたファッションでハットを被り、ゴブラン柄のジャケットを羽織り、そのジャケットからたまにちらりとワインレッドのベルベッドの裏地が見えた。パンツはごくシンプルな極細のジーンズを穿いている。校内で靴は履けないので来客用と金色で書かれたアイボリー色のスリッパを履いているのだが、恐ろしく不釣合いだった。そして前髪は目のあたりまですだれのように伸ばしていた。ヴィジュアル系ロックバンドを意識しているのかもしれないが、藤崎先輩のえらのはったごつい顔の輪郭ではただ怪しさを醸し

出しているばかりだ。その姿はどことなくマジシャンを思わせた。マジシャンといっても「とりあえず形だけから入って、まだマジックはできません。むしろマジックなんてするつもりはありません」と全身で主張しているマジシャンだ。

藤崎先輩の服を見ると、たまに「その服はどこで売っているんですか？」と聞きたくなるが、聞いたことはない。答えは決まっている「俺が作った」そうに違いない。こんな服を売ってもどこの誰が買うというのだ。おそらく藤崎先輩しか買わないだろう。月に一回来るのだっても俺たちの絵の指導の他にも自分のファッションを見せるためという理由もなるかもしれない。そもそも同じ服を着ているのを見たことがない。

「で、今回のコンクールはデッサンだ」
意気揚々と石膏像を俺たちの目の前に置いた。
石膏像の名はメディチ。天然パーマのハンサム胸像。
しかし、藤崎先輩の意気込みとは裏腹に俺のモチベーションはイマイチ上がらない。
横目で三雲を見る。いつもなら口の端を上げるだけのいつもの笑みを浮かべつつも、藤崎先輩の話に目を輝かせスケッチブックに向かうヤツが、今回に限っては椅子に座り、足を組んでつまらなそうにくつろいでいた。そんな俺たちに気づかないのか藤崎先輩は話を続けていた。

「デッサンでは比率、パース、ライティングの三つが重要で、この三つで分析していって問題点を切り分けて、あとはどこが問題なのかをよく観察して、……聞いてるか？」
メディチの天然パーマから鳩でも出てくれれば拍手でもしたのだろうが、すでに知っていることを話されても眠気が増すだけだ。以前は俺が知っていることでも藤崎先輩の口から出た言葉をよく聞いて、

少しでも自分の糧にしようとしていたのだが、何故か気が乗らないのは仕方ない。

「お前ら、なぁ。美大行くんだろ？受験に備えようと、今回のコンクールでデッサンをマスターして……」

ようやくそんな俺たちに気づいたのかそんな失望したような顔をこちらに向けた。

そんな顔されてもこっちが困る。

そもそも美大に行くつもりなんてさらさらない。

俺が言うより先に三雲が言った。

「いやいや、センパイ。勝手に進路決めないでくださいよー。つか、ボク、W大に行くんで」

「あれ？T映画専門学校だったんじゃね？」

三雲と藤崎先輩との話を成り行き任せに聞こうとしていたが、思わず俺は口を挟んでいた。

三雲が先生に言われたとおりの進路にしたのを少し意外に思ったからだ。

「そうそう、行きたかったんだけどねぇ。調べてみたら映画って専門学校に入ったからできるってモンじゃないらしいんだわ。つか、W大の映研サークルから映画監督になった人もいるらしいからさ、そっちにした。まぁ先生や親の言いなりもつまんねぇから、今のところはT映画専門学校に行くってつっぱってるけどさ」

いたずら好きそうな笑みを浮かべて三雲は言い、それから俺たちの会話に呆気にとられている藤崎先輩に言った。

「んで、雨宮は短大で……あれ、経済の方だったけ？まぁいいや、つーことで、美大にはウチの学校からは誰も行かないんすよ」

「そうそう、つか、今更メディチのアニキ描いても、ねぇ」

俺と三雲は目を合わせて苦笑いをした。その様子に藤崎先輩の顔に戸惑いの色が浮かぶ。
確かにそうだろう。あれだけ熱意を持っていた俺たちが一ヶ月の間にどういう変化があって、こうも冷めてしまったのか不思議に思っているのだろう。しかし、その戸惑いの色は次の瞬間、失望に変わった。

「いやいや、まぁ、それならいいだけどな。かっていたんだぜ、お前らの才能」
「いやぁ、才能をかっていただいて、すまないですけど、ボク、なんかコンクールに興味が持てなくなりましてねぇ。だってこれやって何になるんですか？そりゃ美大に行くなら分かりますよー。ですけどね。ボク、映画撮りたくなっちゃいまして、そして雨宮は平々凡々な人生を選択いたしまして、まぁ」
「それにしても、もったいねぇな」
「コンクールなんて言ったって、ようは高校美術部の生徒同士の技量の比べ合いでしょ？つまり美術に携わるものにしか分からない技量を見せあってもねぇ。もっとダイレクトに人の心に響くものを描いた方が今のボクには有意義かなぁ、と思いまして。そりゃ、ボクは藤崎先輩を尊敬してますよ、マジで。技術もある。センスもある。高校で大賞を獲った時の絵だってマジで感動しましたよ。……そういえば最近先輩の絵を見てないですけど。まぁ、もったいない、って言われれば悪い気もしませんけどね。新たな目標の前にデッサン・コンクールなんて、もうやる気がしないんですよ」
「最前線で戦えそうな優秀な人間が戦線離脱って残念だよ、俺は」
「単純に戦いに意味が見出せなくなったってことですよ」
「それで映画、と」
「絵は見る人が少ないじゃないですか？せいぜいよくて周囲に褒められるか、美術館に飾られるのが関の山。けど映画なら多くの人が見るじゃないですか？だったら多くの人に共感してもらえる映画の

方がやりがいがあるに決まってますよ」

藤崎先輩と三雲の話は続いた。

お互い、譲り合いや歩み寄りもない。三雲は一応、藤崎先輩を立ててはいるが、どこか見下していた。

その様子を俺は眺めていて「なるほどな」と感心した。宮坂の言っていた通りだ。三雲には壁がある。自分とは違う者を受け入れない。正否の判断より自らの感情を。向こうの正論は詭弁で煙に巻き、一般論に対しては安直だと嘲笑う。会話というより拒絶だ。

「ボクとアナタは違います」

そんな三雲に対して藤崎先輩も冷静に対応をしていた。

もともと個性の強い人だ。しかも美大に入学してからさらに磨きがかかった。

『己』が全てな人だった。美大がどういうところか分からないが、なんとなく個性的な人間の集まりだろう、ということは想像できる。その個性の集まりの中で揉まれた芯の強さを先輩から感じた。

お互いがお互いの主張をし、お互いを隔てる見えない壁の厚みを増してゆく。

けれど、お互い言いたいことを言ってスッキリしていくようにすら見えた。

俺はそれを黙って眺めていた。

ただ天然パーマのハンサム石膏像のメディチだけが「場違いなところにいてすみません」と居場所のないように床を斜めに見つめていた。

映画と美術の良さの違い、どちらが鑑賞とするものとして優れているのか、そもそも芸術とは何なのか、お互い拒絶し合い、共感しつつも明確にお互いとお互いが理解できないものだと言うことを認識しあっていく。そんな会話も終盤に差し掛かった。

もうそこに尊敬する藤崎先輩はいない。ただの美大生がそこにいた。

俺はどちらかといえば三雲の意見に汲むところが多かった。
そして藤崎先輩の意見は美大生としての言葉として当たり前の受け取られた。
どちらが正でどちらが否ではないだろうが、藤崎先輩の言葉がひどく自分とは遠いものに感じる。
昔は目指していた人なのに、いつからか尊敬の対象から眺めるだけの対象に変わっていた。
俺は三雲と藤崎先輩の会話を聞きながら、いつから藤崎先輩を尊敬できなくなったのか、なんとなく考えていた。

「三雲さ、お前。じゃあ今、何描いてるん？」
「先輩、石膏像や裸体は描いたことあるでしょ？アレなんかよりスゲー、セクシーで完成れたモンですよ」
「何だよ」
「カラスの死体」

三雲の言葉に藤崎先輩が呆れるように苦笑いをした。
それは救いようもなく理解できない人間に向けられる類の笑いだった。
理解できないのも無理はないだろう。そのカラスの死体を描いている俺だって理解できない。
けれど俺の中の価値観が変わった理由はカラスの死体だ。……たぶん。

その一件以来、藤崎先輩は部活に来なくなった。
先輩の考えを拒絶したに等しいが彼に価値を見出せなくなった俺には逆に清々しいくらいだった。
先輩はどちらかと言えば三雲の才能をかっていたように感じる。

指導に行く日は事前に三雲にメールをしていた。部長の俺にではなく。
人物的にも三雲の方が俺よりとっつきにくいはずだったはずだ。けれど三雲に連絡するということは、三雲の方に惹かれるものがあったのだろう。それが何なのか俺には少し分かる気がする。
だから軽い嫉妬を感じても納得はしていた。

ただ見返してやればいいと思っていた。
先輩も三雲も、俺の前に跪かせればいいのだ、実力で。
そして慢心ではなく、二人を見返せる実力を俺は持っている。
けれどもう先輩はいない。ただ三雲との一騎打ち。言い換えればタイマンってヤツか？
先輩を惹きつけていた三雲。
そして俺にカラスの死体を突きつけ、その絵で完成したものを見たいと思わせた。
悔しいが一歩先に行っているのは三雲の方だろう。

「まったくキミは指に絡んでいるこの運命の赤い糸が見えないのかよ？」
昨日、三雲が左の小指を立てながら言った気色の悪い言葉を思い出した。
確かに今、ヤツの小指に赤い糸が絡んでいる。そして俺の首に赤い糸が絡んでいるのかもしれない。
ヤツが少しでも動けば俺は息苦しくなる。気に喰わない、とても。

「それにしても今更デッサンなんてなぁ。馬ッ鹿らしくて。そりゃマジメにやれば面白いんだろうけどさ。つか、よくよく考えれば藤崎のヤツさぁ。わざわざご苦労だよな。高校まできてボクらに指導って……よほど美大で現実突きつけられて参っていたんじゃね？今まで自分がトクベツだと思っていたらボンヨウだった、とか？」

先輩が去ってから三雲が言っていた。
俺は、そういう見方もあるのかと少し関心したが、三雲の手の返し方っぷりが気に喰わなかった。
その感情が顔に出ていたと思う。けれどその顔を見た三雲は構わずに話を続けた。

「そんで現実見るのが辛くて、かつての栄光を夢見れるボクらのところ来て指導していたりしてな。まったく、美大生らしいカッコいい服着たって、ねぇ？」
「カッコいい？俺はマジシャンみたいにしか見えなかったぜ。メディチの頭から鳩でも出せば面白かったのにな」

俺の言葉に三雲は弾けるように笑った。
まるで子供のように無邪気で周囲を気にせず気の済むまで笑う笑い方だ。
コンクールへの情熱が冷めた途端、先輩に対して手のひらを返すようにしてバカにした三雲の態度が気に喰わないが、気持ちの面では三雲に賛同していた。その気持ちを考えた時に、今まで藤崎先輩の三雲に対しての態度についての俺の嫉妬心があるのかもしれないと思った時、言いようのない悔しさが心の奥底からにじみ出てくる。

○

今までの価値観が変わりつつある。
死んだカラスを観察するのが楽しくなってきた。
鋭く、切り込んでいくように目の前にあるものを分析してゆく。三雲は腐敗しつつあると言ったがカラスの死体は腐敗とはまだ遠いと

ころにいた。あるいはカラスの死体の内部ですでにそれは始まっているのかもしれないが、腐敗というより、自らの重みで死肉が潰れ始めているように見えた。

「『デッド・タッド』って知ってるか？」
カラスの死体を模写しながら三雲に聞いてみた。
名前と作品しか覚えていない。作者不詳の気になる作品だった。

それを聞いた三雲は「ロン・ミュエク」とスケッチブックとカラスの死体から目をそらさずに言った。
そして「写真集貸したよね？」と短く付け加えた。

その言葉でデッド・タッドのことを思い出した。
彫刻というよりシリコンでできたリアルな作品だ。白い床の上に横たわってわずかな生命の息遣いも感じさせず死んでいた。髪の毛には製作者のロン・ミュエクの髪の毛が植えつけられ、筋肉は衰え、下腹が出ていた。そしてペニスが左に曲がっていた。
何故、そこまでリアルに再現しなければならなかったのか。
確か、本には「写実的で人間の肉体を微細に再現しているが、不安で不調和な視覚的イメージを生み出すため、大きさについては工夫をしている」程度の説明くらいしか載っていなかったような気がする。作者がどういう意図でこれを製作したのかまるっきり情報がなかった。
この写真についていた短いの説明文に「この作品を機にロン・ミュエクは一躍世間に名を知らしめた」とあり俺は「ああ、売名のために作った人目を惹く作品を目指したんだな」と安易に切り捨てていた。それが今、別の意味を持ってきている。
精密に描く、どこからどう見ても死んでいるように。

「なぁ、キミにとって死って何？」三雲が言ってきた。
ふとスケッチブックにから目を離すともう日は暮れかかっていた。
その夕闇の中で俺は「死について」と聞かれ、少し考える。そして
『死』そのものになっているカラスを見ながら、死についてを自分
の中で反芻した。

「なんと言って言いか分からないけど。
以前、テレビの特集で見たんだけどな。エコに関しての生態系（ビオトープ）の話
だ。生態系と生態系とはお互い密接な関係をもっているらしい。そ
れをダムや橋、道なんかで遮断すると関わり合っていた生態系はど
ちらも弱体化するらしいんだ。それを避けるために人為的に動物が
通れる道を作ったりする正否を問いかける特集だったんだけどな。
まぁ途中から説教臭くてくだらなくなったんだけどさ。俺が興味を
持ったのは生態系と生態系が別々のようで密接に関わりあっている
ってことだ。多くの接点を持つ生態系は強くて少々の破壊にはびく
ともしない。まぁいくらジャングルだって森林伐採しすぎりゃ、す
ぐにでも不毛の砂漠になるんだろうけどさ。えーっと。つまりは、
だ。関わり合いだよな。共通の接点を持った者同士が影響を与え合
っているワケだ。生態系なんていっても生殖や繁栄だけじゃなくて、
ようは食うか食われるか、誰かの栄養になるか、誰かを栄養にする
かの関係だし、不愉快な面を共有しながらも何か繁栄してるワケよ。
その関係の一切の排除が死かな？もう関わりあえない生態系と生態
系。つまりお互い影響をまるで与え合えない存在になってしまうっ
ていう。良い面も、不快な面も。そして一部が永遠に損なわれ、生
態系自体も弱体化する。人目には見えなくても損なわれた部分が永
遠に残る。少なくとも今の俺にとってはそうだ。あ、生態系という
のは人間個人の比喩な」

「それは分かるよ」

「そしてこのカラスの死体はカラスの流儀に則らず、こうやって死体を人目に曝している。こんなことをするなんて、きっと生前の存在も異質だったんじゃね？カラスの集団に関わり合いを持っていなかったとかそれとも死に様を曝したくなかったけど、否応なくここにいるとか？他にも色々想像力が掻き立てられて、惹かれるね、コイツに」

俺は昔見た生態系（ビオトープ）に関する特番の話に自分の意見を交えつつ、遠まわしに以前は尊敬していた藤崎先輩を不要になった途端、拒絶した三雲を軽く責めているつもりだった。
クラスでいじめられているワケでもないのにあまり交友関係を持っていない三雲にはこの言葉は少し効くかと思ったが、何を勘違いしたのか三雲は俺の言葉に「まるで恋愛だな」と答えた。

俺はその見当違いな三雲の言葉を鼻で笑い飛ばした。
そして夕闇に溶けるよな黒い羽を持つ死体を見ながら、俺自身が言った言葉ではまだ全く説明できない魅力を持つカラスの死体を見下ろす。

とにかく完璧に死を描きたい。
いや、もしかしたら俺はこうやって自らの死に様をさらしているカラスの心境が知りたいのかもしれない。

ロマンチストな現実主義者

関係を共有しあっている生態系（ビオトープ）と生態系（ビオトープ）。
生態系を個人の比喩として三雲に言ったワケだが思い返してみれば、まったくもってその通りだと思う。人間関係と繋がりをもった生態系とは同じようなものだ。

藤崎先輩のいうデッサンのコンクールなんて今の俺たちとっては鬱陶しいだけだ。デッサン。それは技術であって作品ではない。ただ目の前に置かれた石膏像を見たままに正確に描けばいいだけのものだ。昔はそれでもコンクールともなれば燃えるものもあった。同じ目標をもった人間が集まって技術を比べあう。そして俺はその人間たちの上位に選ばれるのだ。それはそれなりの充実感や達成感もあった。しかし今は違う。俺は別に美大へ行きたいワケではないし、デザイン系の仕事につきたいワケでもない。ただ絵が好きで入った部活だ。そりゃ高い評価を受ければ嬉しいが、俺が今やりたいのは違う。他校の美術部の人間なんて知ったことか。最後の作品を作りたい。そしてそれは美術部に入ってからずっとライバル関係だった三雲以上のものを描かなくてはならない。それを最後に俺は地元の短大にでも入って、勉学にでも励み、安定した場所にでも就職し、親から離れて暮らせることができれば、それでいいのだ。

夢が無い？いいじゃないか。追う夢がなければ、地に足の着いた堅実な現実が待っている。
つまりは今、俺はカラスの死体を上手く描ければそれでいいのだ。

けれど藤崎先輩を失ったことで今、俺がぶち当たっている壁をどう乗り越えていけばいいのかよく分からない。それは藤崎先輩が笑い飛ばしたカラスの死体のことだ。どうやったら死を描けるのか。ス

ケッチブックに描かれたカラスは見たまま描いた絵だ。死には確かに近く、模写としてもよく描けている。だがもう一歩足りない気もする。家に帰ってからこの絵を眺めて、観察していると藤崎先輩ならどう描けばいいのか教えてくれそうな気もするのだ。人一倍研究熱心で熱意もあり、俺たち後輩にも気をかけていた。けれど結果はこうなってしまった。三雲を責めるワケにはいかない。俺もあの時そう思ったのだ。藤崎先輩は俺たちにとってもう不要だと。

よくよく考えれば藤崎先輩と三雲、俺で美術部は成り立っていた。俺が一年の頃からだ。当時の美術部は漫画絵を描いている人たちばかりで、美術としての絵を描いていた藤崎先輩はむしろ浮いた存在だった。そこに俺と三雲が入った。もともと俺は漫画はあまり読まない。ただ絵を描くのが好きで入った部活だったし、三雲も俺と似たようなものだった。俺たち三人が意気投合するのにそんなに時間はかからなかった。そして三人で教科書や専門書などから絵を研究し、名のあるコンクールに応募しまくって、三人がコンクールで受賞し始めたことで美術部の空気が変わった。美術部内部では異端者が外部からは高い評価を受けたのだ。そして我が高校の美術部といえばこの三人の存在が大きいものとなった。他の部員は居場所を失い文芸部へと移っていった。（文芸部といってもいわゆる漫画好きの集まったオタク部といってもいいかもしれない）少しマジメに絵を描くヤツもいたが俺たちは黙殺した。上手くなろうとする熱意より実力のある人間を欲していたのだ。

生態系の中の突然変異種が旧い種を食潰して、ヒエラルキーの頂点に立った。

その生態系はさらに変貌を続け、今は死体を曝している一羽のカラスを描く種となり、変化しなかった者を排除した。

藤崎先輩から聞きたい技術はもう聞けないだろう。俺の質問の彼は

答えないし、俺も彼に質問をしない。ただケータイを開いて彼の名を一押しすれば彼とは話すことはできる。だが会話をするには彼とは決定的に離れてしまった。

「カラスの死体を上手く描くにはどうしたらいいのか？」

おそらく彼の返事はあの呆れた笑みだろう。

それに元々堅実な人で奇抜な発想とは無縁の人だ。（彼自身それが許せないからこそファッションを奇抜にしているのかもしれない）

あの呆れた笑みと共に凡庸な一般論を俺に諭してくれるのかもしれない。

ＯＫ。嘲った笑みも凡庸な一般論もいらない。

必要な物は自分で探せばいい。俺という一つの生態系は生態的回廊（ビオトープコリドー：生態系同士を連結し、生物の移動として役立たせるための空間）を必要としていない。無くても俺という生態系（ビオトープ）は自給自足で生息し、カラスのように黒い花畑でも作り出せるはずだ。

崩壊寸前の美術部という生息空間に最後に現れた変異種二名の最後の生存競争。

その勝敗が今の俺の興味の全て。あとは俺の知ったことではない。

家に帰るとスケッチブックに描かれたカラスの死体を見た。一歩ずつ近づいてはいる。ゆっくりだが確かな足取りで。いつか近いうちにそこにたどり着ける確信があった。もうすぐキャンバスに描き、完成品を作ろう。発表の場はどこだっていい。文化祭で公開しようか。それとも美術室の壁にでも貼り付けようか。いや、三雲より上手く描ければいいのだ。ただそれだけだ。

三雲が俺に貸していた写真集『ロン・ミュエク』を思い出し、部屋の本という本を探した。確かに借りたはずなのに、どういうワケか探しても見つからなかった。全ての本をチェックしたにも関わらず

写真集は消えていた。突然、発情して何も飼い主に行方を告げず遠くに行ってしまった雄猫みたいに。探し方が悪いのか、何かと一緒に捨ててしまったのか。仕方ないので俺はめったに使わない父親のお下がりのノートパソコンを開き電源を入れる。そしてネットに接続した。

ネットに接続して「ロン・ミュエク」について検索をしている間、指はキーボードに触れ、文字を叩き出し目はディスプレイを追っていたが、俺は常に何か別の事を考えていた。それはカラスの死体についてばかりじゃない。死のこと、人間関係と生態系こと、歪な恋愛、そして同性愛のこと、赤い糸のこと……何かが俺の中で化学反応を起したように深化してゆく。深く。とても深く。もうすぐで何かに気づくかもしれないという感覚が神経を鋭敏にしていた。

この感覚は好きだ。絵を描く時の感覚に似ている。
深化した感覚は対象するものとの深いコミュニケーションだと思う。

俺は何かを話したり、気遣ったりするのが苦手だ。それを自覚しているし、他人も認めている。おおよそ直せるものではないのだろう。他人も俺がコミュニケーションが苦手なことを知ると必要以上に矯正しようとしなかった。親でさえそうだ。仕方ない。けれど必要最小限で人間関係を円滑にする術(すべ)は知っている。それは頭でだ。心でコミュニケーションをとることが苦手な俺の処世法だ。人の行動を見て頭で相手が何がして欲しいのか理解する。簡単なことだ。それをしてやればいい。俺は他人に少々ドライな印象を与えるようだが、それができるようになってからは周囲とトラブルなくやっている。

それらは絵を描く事によって学んだ。
絵から学んだ事は『現実があって、それから論理が出来上がる』ということだ。

どんなエキセントリックな現代アートだってまずは現実がある。対象となる物を観察して自分の中へと受け取る。それを自分の中で形に換える。人との関わり合いもその応用だ。俺はそれで生きている。俺にとって絵は言葉より進化したコミュニケーション・ツールだ。少々誤解を招きやすいが、そもそも理解や現実なんて誤解の塊だろ？

それらを教えてくれたのは絵だが、カラスの死体を最後に俺はそれを手放す。

何故？それ以上描けば本当にコミュニケーション・ツールになってしまうからだ。他人を喜ばせるためだけの絵に。そこに俺はいなくなる。自由な絵はどこにもない。無目的な絵こそ俺のルーツだ。意味がある絵なんて、そんなの意味ないだろ？カラスの死体は他人のためでなく俺個人のコミュニケーションとしての最後の絵だ。

パソコンのディスプレイにロン・ミュエクの『デッド・タッド』が写し出された。

よく観察する。遠目であるいは近づいて、そして食い入る様に。自分の解釈で、あるいは他人ならどう見るかという別の角度で、視覚と知覚をフルに動因してそれを見て理解しようとした。

たとえ「理解や現実が誤解の塊」だとしても俺と俺の絵を見る者の納得する誤解でなくてはならない。

デッド・タッドは顔面は蒼白で目の周りは黒くくすんだ色を落とし、目は静かに閉じられていた。目や口や頬は彼の生きた歳月を物語るようにやや垂れていた。顔と同じ色に蒼白くなっている身体に筋肉は少なかったが、下腹だけはややぽっこりと余計な肉がついていた。そしてその胴体から手も足がまるで棒のように伸び、白く固く硬直していた。そして彼は男性性器を隠すこともなく曝していた。それは左に曲がっていた。その左曲がりのイチモツを見て、俺はなんとなく右手でマスターベーションをし続けると男性性器は左曲がりに

なる、という俗説が頭の中をよぎる。

何故、これが作られたのか解説はなかった。これを機にロン・ミュエクは名声を得たとだけ書かれている。その他になんの説明もなければ作者の言葉もない。ただこの作品には作者自らの髪を植えつけた、とだけあった。その一文が俺の中で引っかかっていた。

自分の一部を作品に取り入れる。作品は完全に自分の一部ということか？もしくは自分の一部であったものの集合体だ。もともと父親の死体の精巧なレプリカだ。去っていった自分の一部。

「死とはそういうことだよな」と俺は独り言を言った。その声は深夜の自分の部屋に響いた。まるで自分の声でないように。そして消えていった。

俺の父親のことを思った。

ごく普通の父親だ。昔は何かを必死に目指していたのだろうが……今はマジメで面白味なく、普段は夜遅くまで会社で仕事をし、週末には家で寝ている。この人は何が楽しくて生きているのだろう、と考える。毎日の晩酌のビールなのか、それともたまにふらりと出かけてレンタルショップで借りてくる古いフランス映画を観る事なのか、それとも仕事が生きがいなのか。全部違うように思えた。きっと俺と住んでいる世界が違うのだ。彼の世界の楽しい出来事と俺の世界の楽しい出来事は決定的に違い、生きがいもそこでは別の色をしている。そして何故か知らないが（もしくは必然的に）こうやって一つ屋根の下で暮らしている。この人が死んだら？生活に困るだろう。ただそれだけだ。けれど生活に困る以外の何かが決定的に失われる予感がする。

お互い理解と現実は程遠いところにいるのに感じる喪失感。

宮坂は言った。私は仮面を被って生活していると。現実は多かれ少

なかれ人は少し現実とは距離を置いて生きているんじゃないのかと思う。どんな人も少し妙なところがあるように。そして絵だって現実を描いているワケじゃない。紙の上に描かれた色を現実の物と錯覚させるだけだ。けれど死はまるっきりの現実だ。しかもそれは石膏像とは違う種類の現実だ。思考として感知できる現実。そして人の心で知覚できる種類の決定的な現実。

そこに誤解と現実との距離はない。
決定的な現実がそのままあるだけなのかもしれない。
「ロマンチストな現実主義者（リアリスト）め」
俺は自分の部屋から三雲に向かって憎々しく吐き捨てた。
けれど部屋に響いた声はどこか嬉しそうに俺の耳に届く。

○

翌日、俺は映画館の前にいた。
宮坂に呼び出されたためだ。日曜の映画館前は意外に人はまばらだった。
秋晴れの日曜日に人は暗いところで座って大画面で繰り広げられる映像を観たくはないらしい。それよりは晴々とした空の下で散歩なり、釣りなり、ジョギングでもしていた方が有意義に感じるのかもしれない。
高二の男女二人、ハタからみればデートに見えるかもしれないが、俺達にとってはデートというより、いつもの調子で宮坂と世間話をしているだけだった。
大体、宮坂のファッションは男とデートしようというものではなかった。アバクロガールズの白いパーカーにジャストフィットした紺のセーターにタンクトップを重ね着して、色落ちしたブルージーン

ズに黒のコンバース・ワンスター。俺が着てきたジャケットが何か女々しく思えた。正直俺より男らしい。

「どの映画にする？」「アクションでいいんじゃね？」「えー、やっぱこっちの恋愛モノでしょ？」「宮坂と恋愛観てもなぁ」「じゃ、雨宮に合わせてディズニー？」「お子様ランチじゃ腹一杯にならねぇよ」「でもお子様ランチって旗付いてくるじゃん」とか、そんな恋人というより、友達ムードたっぷりの会話の後、リュック・ベッソンのアクション映画を観ることにした。もちろん映画代金はワリカン。付き合いといっても仮面の恋人だろ？どちらかといえば宮坂に金を払ってもらいたいくらいだったが、何故か宮坂は俺に聞こえるように舌打ちをした。

映画は面白かった。
ハードボイルドでデンジャラス、ユーモアがあればクールに決める。山があれば谷がある。分かりやすく感情移入しやすいストーリー。男と女は結ばれて、敵はしぶといが遂には倒れる。ストーリーは映画の中では完全に完結せず適度に問題定義を投げかけてくる。

完璧じゃないか。完璧すぎてＤＶＤが販売されると余計な映像が付いてくるコレクターズ・エディションが真っ先に売れ、蔦谷でレンタルが開始されると全てのケースに貸し出し中の札がつけられ、しばらく経つと中古でちらほら売られ、一年経てばハリウッドプライスとか、いかにもカッコよさそうな名前の付いた特売で三枚三千円程度で売られ、その内テレビのロードショーで放送され、最後はワゴンセールで千円以下で売られるところまで容易に想像できた。

「すっごい、面白かった」

宮坂の素直な感想だ。言葉に出せば俺も同じだ。だから頷いた。

正直、今は映画を観たい気分ではなかった。何か深化してゆく思考がごく普通の日常でふと潜ることを止めてしまうのではないか、と俺は危惧していた。今はどこまでも潜って行きたいのだ。虚飾を取り去った現実であり、誤解に囚われている故に見ることのできる現実とかそういったものだ。
つまりは何かによってふと魂を抜きとられ、全てを冷たくしてしまったカラスと対峙していたい。

けれどよくできた映画がそうであるように映画の話題は尽きなかった。
だから宮坂との話も弾む。心のどこかにある危惧はなりを潜め、わずかに機能しつつ、頭のほとんどは映画の話になった。元々、宮坂とは話しやすい。気は合うのは確かだ。今は映画に関しての会話をするのが楽しい。

笑顔で映画の話をする男女二人。確かに今の状況を第三者から見たら恋人に見えるかもしれない。
男と女。女と女、男と男より容易に結びつけて見ることができるだろう。これが同性間ならただの仲の良い友人に見えるに違いない。

どんな弾んだ会話も何かの拍子にふっと空白が空く時がある。その時に宮坂が「お茶でも飲んでいく？」と言ってきた。帰るにしてもまだ時間はあるし（それも映画の不思議だ。少なくとも俺にとっては長すぎもせず短すぎもしない適度な時間を潰せる娯楽だ）、心の奥には早く家へ帰って絵を描きたいというくすぶったものがあったが、そのくすぶりは俺に宮坂の誘いを断って家に帰らせるほどでもなかった。

駅の近くのスターバックスにでもしようと提案したが、混んでいるということで却下され、駅構内の喫茶店にするかと提案したら、ま

た却下された。

「じゃあ、どこにすんだよ」

「いや、まぁ、行きたいところがあってさ」

宮坂は「まぁついて来て」と言って駅とは逆方向のショッピングモールに向かって歩き出した。

宮坂は常にハッキリとモノを言うタイプの人間だ。そりゃ仮面を被っているだの言っていたが、俺にはズケズケとモノを言っていた。少なくとも仮面ではないだろう。もしかしたらズケズケとモノを言う仮面なのかもしれないが……とにかく宮坂の物言いに何か引っかかるものがあった。

「どこだよ」と俺は聞いた。

「ルイジアナ・ママって喫茶店」

「あんまり美味しいコーヒー出ささそうな店の名前だな」

「名前はアメリカンな感じだけどね。メニューは女の子向けで美味しいよ。オススメはウィンナー・コーヒーとアイリッシュ・コーヒー。私はアイリッシュが特に好き。寒いときなんてウィスキーが入っているからすぐに温かくなるし、ホイップの甘さも疲れた身体を癒してくれて絶妙っす。今日は暖かいからパフェかな」

「パフェはいいよ。ホイップとかクリームとか、俺、甘いの苦手だから普通にコーヒーでいいや」

「男子って甘党が多いって聞いてたけど……」

「それは大多数の意見さ。俺は甘いの嫌いだし」

ルイジアナ・ママはビルの二階にあった。ちなみに一階は美容室になっている。その横にある気を抜いていると見落としそうな階段から上って行く。店の入り口のドアにはトウモロコシのイラストとルイジアナ・ママと書かれた看板があり、その看板の下にアルバイト募集の張り紙が控えめに張られていた。喫茶店なのに看板のデザイ

ンにトウモロコシが使われているのかよく分からないが、ドアの向こうからコーヒーの香りが漂ってきていた。

店内の内装はレンガ造りを思わせる内装で、アメリカンな名前とは裏腹にヨーロッパ風な落ち着いた雰囲気の小さな店だった。客は俺たちの他に四人。二十台前半の二人と三十台前半の二人だった。どちらも女友達二人で来たらしく、軽い食事をとりながら、俺達若造に見向きもせず女同士の会話をしていた。

「いらっしゃいませ！」

若い女の子の店員が明るい声で俺達に対応してきた。

そして禁煙席に俺達を案内して、メニュー表を俺に手渡した。

そこで店員の顔を見た時、見覚えのある顔だと思った。

胸の名札を見ると『アルバイト・白石香織』と書かれてあった。

思わず宮坂の方を向く、宮坂はまるで何事もないようにメニュー表を見てチョコレートパフェを頼み、店員……白石の顔を見ようともしなかった。

コーヒー&シガレッツ

もしかしたら俺はこの時、宮坂が言っていた仮面を始めて見たのかもしれない。

宮坂はメールでラブレターを渡した白石香織に対して、ただのウェイトレスとして接した。まるで他人に対して話すようにチョコレートパフェを頼み、俺に対しては必要以上に親しげな笑みを浮かべメニュー表を渡し「確か甘いの苦手だったよね。コナ・コーヒーがいいかもよ」と言う。そして先ほど観た映画のことを話した。その話は映画館からここまで来るのに話した内容がほとんどだった。俺は少し不快感を覚えながらもその話題に合わせた。

既成事実というか、付き合っているというポーズをとるだけでいいと思っていた自分が甘かったのか。

まさか白石香織がバイトをしている店に俺と一緒に行くとは思ってもみなかった。穏便に収めたいと言っていたのは宮坂じゃないのか？それとも言葉でなく行動で示す方がいいとでも思ったのだろうか？とにかく俺の気持ちになってくれ。お前と俺はトモダチなだけで恋人でもなければ、辛苦を共にする親友でもない。ただの話仲間だろう？俺は白石の視線を感じながら、宮坂の言われるままコナ・コーヒーを頼んだ。

白石香織は俺たちの頼んだメニューを確認のため繰り返す。

俺は宮坂と顔を合わせるワケでもなく、白石の顔をみるワケでもなく、テーブルサイドにある色彩豊かなデザート・メニューを眺めていた。

白石の声は何の感情もこもってない。ただチョコレートパフェとコナ・コーヒーですね、と注文されたメニューを確認した後、メニュ

ー表を受け取ってカウンターの奥に消えていった。

「ごめんね」宮坂が俺に言った。

「正直に言ったら来なそうだったからさ」

「かもね」と俺は言ったが実際どうだろう？言われても来たかもしれない。

俺は彼女達の関係からは部外者に近い。ただ宮坂に少し協力しているだけだ。

ただとばっちりは嫌だし、人を意図的に傷つけるのは趣味じゃない。

しばらくして白石ではない別のウェイトレスがチョコレートパフェとコナ・コーヒーを運んできた。

そしてカウンターの奥から薄手のトレンチコートを着た白石が何かから逃げ出すような様子で出てきて、こちらを一瞥もせず早足で帰っていった。その横顔は特異な病気を抱えた病人のように無表情だった。

「いいのかよ」俺は言う。

こんな事をしても嫌われて困るのは宮坂の方だろう。

そんな俺の心配に対して、宮坂は無言で自分のケータイ電話を取り出し、受信メールの一覧を俺に見せる。下へスクロールするとしばらく白石香織の名前が続いた。もしかしたらこのケータイのメモリには白石香織しか記録されていないんじゃないか、と思われるくらい。

「読む？」

俺は首を横に振った。読まなくても文面が分かりそうな気がした。

「だからさ。言っても聞くような人じゃないみたいだし。このまま

にしておいてもお互いに悪いしさ。ハッキリ行動に示した方がいいと思ってさ。他にいい方法もないし。学校で恥じかかせるよりはいいかと思って」

さきほどとは打って変って、お互い黙り、窓から外を見た。

下には歩道を行きかう人のが見え、空は鉛色に染まっていた。

やがて、ぽつりぽつりとガラスに水滴がつく。

「女心と秋の空」俺は呟く。

宮坂は重いため息を吐いた。深呼吸のように長く、細い息だった。

けれど深呼吸のように体内に空気を入れることはできない。ただまとわりつくような重苦しい空気を一度吐き出し、再び同じ空気を吸うような、そんなため息。

○

次の日の放課後、美術室で俺は一人でスケッチブックを眺めていた。

三雲はまた担任に呼び出されていた。

問題があって呼び出されているのではなく優秀だから呼び出されていた。高校最後の一年間を勉学に励んでW大を目指すか、それともダラダラやってT映画専門学校に行くかの選択での呼び出しだ。だが本人はもうW大に行くと決めていた。しかし、親と担任の言うことを素直に聞くのが嫌だから、と子供じみた理由でT映画専門学校へ行くと見せ掛けで突っ張っている。

俺が三雲の親ならぶん殴って言う事を聞かそうと思う。ただ単なるワガママ小僧ごときにナメられてたまるか。大人の沽券に関わることだ。むしろ俺が三雲の親の代わりにぶん殴ってやりたい。単純にイラつくから。

だいたい変なことに無駄に時間を費やされても困る。カラスの死体を描く時間が惜しい。
カラスの死体の事を考えると居ても立ってもいられなくなる。

今、カラスの死体こそ俺にとっての興味の全てだ。そして、今、この心境で描かなくてはならない。誤解と理解と現実の狭間にある確かな真実を理解せず答えをだせないまま模索しているうちに。

俺は常に変化する。心境だったり、身体に成長だったり……時を止めておくことはできない。けれど絵は今を映す。今、この瞬間のこの心境を一枚の絵にすることができる。今、カラスの死体を描かなくてはならないのだ。それもライバルの三雲と一緒の方がいい。その方がいいものが描けそうな気がした。

だから一人、美術室でヤツが来るのを待っていた。
スケッチブックに描かれたカラスの死体（もう四羽描かれている）を眺めながら、今日はカラスの死体がどう変化したのか頭の中で思い描いていた。

いったい俺はどこまで死体と向き合うつもりなんだろう、と思う。
三雲が描くのなら俺は三雲を追いかけるようにして描くのだろう。
腐敗し、骨になって、死体ですらないカラスの残骸になるまでだろうか。
今、こうやって死体と向き合って何かが深化していく感覚がある。
研ぎ澄まされ、まるで今までの自分とは違った別の視野だ。この視野や感覚が死体と向き合うことで変化してゆく。今の自分では想像も付かない感覚。もしかしたらある一定のところまで行くと俺自身が変わってしまうのではないだろうか。

抽象的だった死を眺め続けて、現実のものとして受け入れる。

今までの自分が変えるということは、周りの世界もまるで変わったものとして見えてくるに違いない。

「百年後、この駅の構内にいる人、皆、死体になるんだぜ」
いつだったか三雲の言っていた言葉を思い出した。
おそらくはそういう感覚を手に入れるのだろう。
俺は三雲と同じになりたいのか？同じ感覚でこの世界を見てみたいと思っているのか？
そうなのかもしれない。ライバルとして一歩先に行っている人間と同じ視線でものを見てみたい。

その時、美術室の戸をノックする音が聞こえた。
その遠慮しがちなノックを宮坂だと思い「三雲ならいないよ」と返事をした。
しかし、戸が開くとそこに現れた女子は宮坂ではなかった。
その女子は天然パーマの髪を短くしていた。少し垂れ目でメガネをかけており、顔は痩せているが不必要にこけた頬が不健康な印象を持たせる。そしてスカートは膝下丈で内履き用の運動靴は買え換え時を失ったまま徹底的に古びていた。

「何か用？」
宮坂と間違えたバツの悪さもあって、俺の声は不機嫌だった。
それとその女子のおどおどした態度が俺の不機嫌さを加速させた。

「……いえ、あの」
口ごもり何か言いたそうにしていたが、何も言えずに気弱そうに立っていた。
この女子の顔の知っている。自分のクラスにいるはずの子だが、名前がなかなか思い出せない。

その女子はしばらく下を向いていたがやがて意を決したように手に持っていた白い封筒を俺に渡した。
一瞬、ラブレターかと思った。こんな名前も思い出せない女子からラブレターをもらったところで嬉しくともなんともない。むしろ目の前で破ってやろうかとすら思った。けれどその封筒に書かれた名前を見て俺は驚いた。

「……あの白石さんに頼まれて、じゃあ」
それだけ言うとまさに狼から逃れるウサギのごとく美術室を出て行った。
俺は『白石香織より』とだけ書かれた白い封筒を手に長いため息を漏らした。

「渡す相手が違うだろう」
殺風景で何の装飾もない封筒だった。まるで容赦なく全てを凍えさせる北国の雪原を思わせるくらいの殺風景さだ。封筒止めのシールすらなく、まるで「さっさと読んでくれ」と言わんばかりだった。

そういえば、あの女子は白石のグループにいた子だ。確か名前は岩淵だったと思う。下の名前はどうしても思い出せなかった。性格がおとなしく地味な岩淵は垢抜けた連中の多い白石のグループの中で異質だった。どうして白石のグループにいるのか分からないくらい。おそらくは仲がいいとか、話が合うとかそういう友好的な理由でグループにいるのではなく、周りを引き立てるためにいるのかもしれない。もしくはこういうパシリ的なことに使うために連中に可愛がられているのだろう。

そんなパシリが持ってきた殺風景な封筒。
中身の内容はなんとなく分かった。
あの喫茶店での件に関してのことに違いない。

でもメールを無視して、バイト先にまで行って拒否したのは宮坂だろ？
恨むなら宮坂を恨めばいい。例え俺が仮の彼氏でなく本当の彼氏だとしても俺は無関係だ。
俺はしばらく宮坂を恨みながら封筒を眺めていたが、眺めているのすら億劫になり中に入っていた手紙を取り出した。宮坂のメールを読んだ後だったので長々と何か書かれているかと思えばたった一言だった。

『〇〇駅で待つ』

「挑戦状じゃあるまいし」
俺はため息混じりに呟いた。
しばらく白石がボールペンで書き殴った手紙を見ていたが、俺は決心した。
これはただの誤解だ。けれど宮坂に協力した以上は、俺も責任を取らなければいけない。
いらない誤解で残り一年の学生生活で余計な神経を使うのは嫌だ。早く誤解を解いて楽になろう。悪いのは宮坂だ。もしくは勘違いして宮坂に恋愛感情を抱いている白石。俺はそれに巻き込まれただけだ。

まったくこの世は誤解だらけだ。誤解で世界は構成されている。
真実ってヤツは、あるのかないのか分からないくらいほんの少し。
ＯＫ。いつもの俺の見解に間違いはない。

俺は机の上に「帰る」とだけ書いたメモと美術室の鍵を置いて〇〇駅に向かった。
あとは三雲が鍵を教務室に返してくれるだろう。後で何故帰ったかしつこく聞かれそうな気もしたが、適当に答えておこう。いや、話

してもいいかもしれない。どうせアイツも友人は少ない。他人に話してクラス内に白石の性癖に関してバラすことはないだろう。興味を持って白石に付きまとうかもしれないが、アイツの見解も聞いてみたい。

「同性愛ってどう思う？」と。
アイツはどう答えるだろう。
「キミには赤い糸が見えないのかよ」
そう答えるような気がした。

○

駅に着くとそこには帰宅中のサラリーマン、買い物帰りの主婦が多く、わずかに学生の姿がちらほら見られた。帰宅部は帰って家なり、塾なりへ行っているのだろう。そして部活動に励んでいる学生が帰宅するには早すぎる。
そのまばらにいる学生の中に白石の姿を探したが、どこにもなく、少しほっとした。
そもそもデリケートな話だ。
白石は同性愛者。そして俺と宮坂は普通の男女（恋人というより友人だが）。けれど白石にとっては俺が恋敵。同性愛者が俺に何を言うのだろう。

もし今まで同性愛者だということを黙っていたのなら、それは同性愛に対しての後ろめたさがあるに違いない。そうだとしたら俺を怒らせてクラス中に同性愛者だということをバラす可能性も考えるだろう。あの手紙だって、何故あんなにも殺風景だったか？（俺に対しての威嚇もあるだろうが）俺か宮坂がヤケになってクラス中に白石のことをバラす時の事を考えれば、ああいう情報の何もないモノの方がいいに決まっている。

おそらく白石は、一時の苛立ちから衝動的に手紙を書いてしまった。
そして白石の仲間内で人畜無害な岩淵を使って手紙を俺に渡した。
しかし冷静になって考えてみればこの行動は自分にとって不利なだけだ。そう判断したのだろう。だから今、ここにいない。

俺は胸を撫で下ろした。白石を傷つけた事は悪いが、妙な事に巻き込まれてもつまらないだけだ。
学校に帰るのも面倒だし、カラスの死体を描くのも明日にしようと、俺は時刻表を見て帰宅する時間を探し始めた。

そんな時、「雨宮」と名前を呼ばれ、肩をぽんと叩かれた。

後ろには白石香織の姿があった。
白石は学生服ではなく普段着姿だった。
ベージュのAラインコートに胸元と裾のそれぞれ二段のシャーリングとレースの付いた柔らかい素材の白いワンピース。そして、ややヒールの高いウェスタンブーツ（お陰で俺より少し背が低いはずの白石だったが、俺と目線は変わらなくなっていた）。そして首には軽めにマフラーが巻かれていた。そして艶のあるロングヘアに赤いフレームのメガネ。そのメガネの奥の瞳は俺を冷たく見据えていた。少し背伸びしているような感じのファッションのような気もしたが、可愛らしい顔立ちの白石に凄く似合っていた。正直、宮坂よりも女の子らしく魅力的なくらいだ。

それにしてもメガネだ。メガネには度が入っていた。
白石はメガネなんて学校ではしていなかったはずだ。

「似合うね」
我ながら間の抜けた事を言ったと思う。

「メガネのこと？これアラン・ミクリ」
「いや、メガネじゃなくて。メガネもあるんだけど、白石さんってオシャレだなぁってさ。つか、アラン・ミクリって高いんじゃね？」
「ありがと。高いものが欲しいからバイトしてるんだけどね」
笑顔で何気にない会話をしたが、白石の視線は静かに俺を責めていた。
そして俺に敵意にも似た感情を言葉に乗せた。

「着いて来て」
白石はくるりと踵を返し、歩き出した。
「あのさ。白石さん。誤解なんだよ」
俺の言葉に「後で聞く」とだけ言って俺の方に向きもせず言った。
俺は仕方なく後から付いて行った。
白石は声だけでなく歩き方にまで心情が現れていた。カツカツと踵をアスファルトに突き刺すようにして歩く。俺を責めるように。これがウェスタンブーツでなくハイヒールなら氷にアイスピックを突き刺すような冷たい跡をアスファルトに付けたかも知れない。そんな攻撃的な行進をしながら駅前のアーケードの中の『珈琲屋』という喫茶店に入った。

「確か甘いもの苦手だったよね。コナ・コーヒーが美味しいところ探しておいたんだ」
テーブルにつくとメニュー表も見ず、ウェイトレスにコナ・コーヒーとアイリッシュ・コーヒーを頼んだ。そしてバッグから青い水彩の筆跡が花のようにデザインされたタバコを取り出す。その箱にはCAPRI（カプリ）と書かれている。その箱の中からスタイリッシュな極細のタバコを取り出し、口へと運び、ライターで火をつけた。
一連のクールな動作が馴染んでいた。
学校で仲間と陽気に笑いながら話をしている姿から想像もできない。

そして彼女は「ん」と俺にタバコを勧めた。
俺はタバコを手で制し「誤解がある。話を聞いてくれ」と言った。
白石は極細のタバコを持ちながら手を組んで俺の言葉を待った。
タバコの煙が空調の風に揺れて、俺のところにまで臭ってくる。
その臭いはどこか甘く感じられた。

「そもそも、俺は宮坂の彼氏じゃない。ただ宮坂と一緒にいただけだ」
俺の言葉に白石は何も反応せず、タバコを再び口に運んだ。
そのタバコを口にそっと咥えるしぐさが、どこかセクシャルなものに感じる。

俺は話を続けた。
「宮坂はアンタを好きじゃない。もちろんその気もない。ただのノーマルな女子だ。けどアンタたちの間で何か誤解があったみたいだな。だからその誤解を解くために俺に彼氏のフリをしてくれと頼んできた。まさか宮坂がアンタのバイト先にまで連れて行くとは思ってもみなかったけどな。ハッキリ言って俺は宮坂をどうとも思っていない好きでもないし、嫌いでもない。宮坂も同じだと思う」
「ホントの事、それ？」
「嘘をついてもどうしようもない。宮坂に頼まれたからやっただけだ。一応、友人だし。それに俺を呼んでもどうしようもないだろ？文句があるなら宮坂に言ってくれ」
暫しの沈黙の後、白石は大きくため息をついた。

「どこまで知っているの？」
「メール二通分」
白石はゆっくりとタバコを灰皿に置いて、メガネを外し、両手で顔を覆った。

「カッコ悪りぃな、私。……でもさ、どうしようもなかったんだ」
コーヒーがテーブルに運ばれてきた。
俺は二日連続でイマイチ好きになれない濃い味のコナ・コーヒーに口をつける。
俺の向かいにあるアイリッシュ・コーヒーは手を触れられることなく、静かにあたたかそうな湯気をたたせ、灰皿のタバコは煙を出しながらゆっくりと灰になっていった。

しばらくして白石は顔を覆っていた手をゆっくりと外し、少し赤くなった目にメガネをかけた。
そして灰になりかかった短いタバコを静かに口をつけてから言った。

「ねぇ、雨宮。あなた、私の事どう思う？」

罰点

「変だと思う。女なのに……っていうか、宮坂より女の子っぽいのにな。女の子が好きなんてさ。でも人は皆、どこか変だと思う」

俺の言葉を聞いてから白石はコーヒーカップのふちを舐めるようにアイリッシュ・コーヒーに少し口をつけた。俺の方にまでコーヒーとウィスキーが甘く混じりあった匂いがきた。その味と匂いに少し落ち着いたのか、メガネの奥にある目の赤さは薄れ、また責めるような視線を俺に投げかけた。

「人は皆、変？慰めているつもり？それとも同情？

私ね。想像してたんだ。あなたをどうしようか、って。加奈のことは好きよ。自分でもどうしようもないくらいにね。それと同じくらいあなたを憎んでいる私がいるの。ホント、どうしていいのか分からないくらい。実はさ。考えていたんだ。あなたを呼び出してどうしようかって。復讐ってヤツ？駅に呼び出して後ろからナイフとか包丁で刺してやろうかとか、電車が来る時に後ろから線路に落としてやろうか、とかね。大勢の人ごみの中で惨めに死んでもらおうって。でもそれって一瞬じゃない？ただ痛くてそれで終わり。つまらないからさ。こういうの考えたのよ。ラブホに誘うの。だって男ってそういう女の子の誘いって断れないじゃない？それで前から好きだったとか、なんとか、ココロにもないテキトーなコト言って抱きついて、汚い男の身体を心の中で軽蔑しながら愛撫するの。そして興奮してどうしようないくらい勃起したあなたのペニスにフェラチオするフリして喰い千切ってやろうって。一番の復讐でしょ？加奈の中に入ったかもしれないし、これから入るかもしれない一番憎いあなたそのものを喰い千切るの。あなたは苦しむでしょうね。時速百数十キロの球が股間に当たって担架で運ばれる野球選手をテレビ

で見たことあるけど、喰い千切ったらその何倍もの痛みじゃない？きっとあなたは苦しんでベッドのシーツを赤く染めながら股間押さえたまま惨めな姿で動けないの。私はゆっくりと穢れた口を洗うわ。あなたの苦悶の声と罵声を聞きながら優雅にね。そしてあなたは男じゃない、女でもない、中途半端な性的身体障害者になって私の気持ちを理解する……考えただけで胸がすっとする。そんな事をしたって加奈が私を好きになってくれるワケじゃないのにね。理屈では分かるの。でも感情は理屈とは別の方を見てるの。どっちが私自身か分からない」

会話の最中、ウェイトレスが隣の席にメニュー表をスーツ姿のサラリーマンに渡し、メニューを取り、コーヒーとワッフルを事務的に運んで行った。もしかしたら白石の声が耳に入ったかもしれない。けれどまるで機械的に動き、表情を崩さず仕事に徹していた。まるで俺達の会話はごく普通の日常会話だと言わんばかりに。白石は一気に話すと、短くなったタバコを灰皿にもみ消し、再びカプリを取り出し、そっと口に咥えた。そのセクシャルなしぐさが悪魔の微笑みのように感じた。白石の話を聞いていると宮坂が見せてくれたあのメールの文章とその後に送られてきた大量のメールを思い出す。この女は言った通りのことをやりかねない。

もし駅で誤解だ、と言わなかったらあのアイスピックのような歩みでラブホまで俺を連れて行ったのだろう。そして本当に適当な事を言ってキスをして抱きついて、俺のペニスに口付けし、たっぷり唾液のついた舌で丹念に舐め回し、これ以上ないくらいに硬く勃起したペニスをゆっくりと深く口に含む。俺は陰毛に白石の鼻息を感じながら声を漏らすに違いない。その時、白石はソーセージでも食べるように当然の事のように歯をたて、喰い千切る。俺は驚きと激痛に悲鳴をあげる。それこそ天国から地獄に突き落とされたような悲

鳴を。白石はそれを見て満足そうに微笑むと口の中から血まみれのペニスを吐き出し、苦痛で震え、うめいている俺に向かって、読み終わったプリントをゴミ箱に捨てるように無慈悲に投げ返すのだ。今言った言葉通りに。間違いなく。

どこまでも攻撃的な本音で話す白石に鬼気迫るものを感じたが、俺はそれに動じずに言った。

誤解を晴らすというのもある。けれどそれ以外にも彼女のある部分に惹かれていた。それが俺を冷静にさせていた。

「俺はカラスの死体を描いている」

「はぁ？」俺の言葉に白石は間の抜けた声を上げ、タバコに火をつける動作が一時的に止まった。

「理解できるか？俺にとっては凄く重要なことだ」

「カラスの死体」自分に言い聞かせるように白石は呟いた。

「分からない。カラスなんてどこにでもいるし、なんでわざわざ死体なんて描くの？もっと楽しそうなものを描けばいいのに」

「それと同じ事。俺はどうして女のアンタが加奈を好きになるか分からない」

「仕方ないじゃない。好きなものは好きなの。どうしてなんか説明できない。生まれつきよ。家庭内暴力もなければ、小さい頃性的暴力を受けた事だってない。ただ女の子が好きなの。私はそうできているのよ。そして高校に来て、理想の子に会ったの。明るくて元気が良くて、遠くから見ているだけで心の一番底、光が届かない部分まで癒されたの。古い言い方だけど太陽みたいだった。私さ。中学の時、怪我で陸上部辞めてから落ち込んでいた時期あってさ。そのせいで暗くなったせいか、いじめられた時期があって。それで高校に入った時からは周囲を気にして仲間を作って、どうやったら、いじめられないか考えてばかり……。学生生活って嫌よね。知ってる

？学校って勉強するためにって理由もあるけど、社会性を学ぶ場でもあるんだって、『和を以って尊し』ってね。和を乱す周囲と少しでも変わった人は仲間はずれ、皆同じじゃなきゃダメなのが世の中じゃん。皆、揃ってどんぐりの背比べ、背が高いヤツは足を引っ張られ、低いヤツは死なない程度に踏みつけられる。そんな息苦しい中で、加奈が私と同じ悩み相談してきてくれたんだ。なんとかしてあげたいじゃない？手に届かないと思っていた子が私の方に来てくれた。運命すら感じるのよ。こうやって今、あなたに加奈は私の事を嫌っているって言われても、まだ諦められないの」

「学校生活云々については理解はできるけど、何で女の子が女の子を好きになるか分からない。俺がカラスの死体を描き始めたか教えようか？そもそもカラスの死体を三雲が見つけて模写し始めた。最初は人間のモデルがいなかったから仕方なしにだ。けど、描いている内に変わっていった。ただの模写じゃない。死、そのものを見つめられるんだ。死ってなんだ？存在の終わりだ。その存在の一番ありのままの姿だろ？そこに嘘はない。どうやって生きてきたのか、どうして死んだのか分からない死体を目の前にして価値観が変わりつつある。真実って何だろうと問いかけてくる。いつか死ぬ。色々な人生がある。カラフルな人生もあれば、薄暗い灰色の人生もあるだろう。意義のある人生もあれば、ろくでもない人生もある。けれど死が最後だ。どういう人生を送ろうが、どんなに飾りつけしようが、こうやって終わる。それが真実だ。俺はそういう虚飾のない真実を描いてみたい」

白石はようやくタバコに火をつけた。

「決定的に違うね、私たち」

一瞬「そうだろうか？」という疑問が脳裏をかすめた。違うようでいて実は同じかもしれない。

ただうまく言葉で説明できないし、会話の本題でもなかったので俺

は頷いて言った。

「そう、決定的に違う。女なのに女が好きなアンタがいるように、死体を見て何か突き詰めようとしている俺がいる。まるで死体愛好者(ネクロフィリア)のように死体のことばかり考えている人間もいる。仕方ないじゃないか。どういうワケか知らないが、俺達はそうできている。人は皆、どこか変だ」

白石は軽く笑いながら言った。

「ペニスを喰い千切ろうとした女性同性愛者(レズビアン)もいれば、オカマになりそうだった死体愛好者(ネクロフィリア)もいる」

「ペニスを喰い千切ろうとした女性同性愛者(レズビアン)とオカマになりそうだった死体愛好者(ネクロフィリア)同士は理解しあえない。けれど一応、形だけでも結びつけるために常識が存在する。けれどそれは俺達の嫌悪する虚飾だ。もしくは憎むべき排他的な社会通念」

「凄い矛盾」白石はさっきの笑みとは違ったニュアンスを笑顔を張り付かせた。「私は排他的な社会通念を利用して友達のまま、ずっと近くにいれば良かったのかもね。生まれつき、そうできているのを隠してトモダチとして付き合っていれば良かったのかも。必要以上に近づかないで、完全に離れないくらいの距離を保ってさ」

「答えは出せたからいいんじゃね？次、頑張んなよ」

白石は唇を固く結び、重罪を犯した人を裁く裁判官のように俺を睨んだ。

そして何か強固な意志を確認するようにテーブルの上で手を組んで言った。

「雨宮、あなた、恋した事ないでしょ？だからカラスの死体なんてくだらない事に夢中になれるのよ。人間なんて恋が全てじゃない？好きな人と全てを共有できるってことがさ。恋って愛って、奇跡じ

ゃない！……人間、孤独なのよ。どこまでいってもさ。仲間がいたって傷つけられるかもしれないし、裏切るかもしれないし、心の中では何を思っているのか理解できない。でも独りになるのは嫌じゃない？どうしてか分からないけど、同じじゃなければいけないのよ。違っていたら弾かれるって、そうできているの。だからグループ作るのよ。自分たちとその他を作れば自分たちの中でまとまっていられる。共感できる似たような人たちならある程度心の中が分かるから裏切らないし、傷つけられる可能性も低いし。私はそうやって上手くやっている。他人よりも必要以上に。私、女の子好きの変態だから。理解してくれる人なんて少ないの。ううん、いまだに理解してくれる人に会ったことはないの。あとさ。次って何よ？一番好きな人に嫌われてすぐに切り替えられるワケないじゃん」

言葉とは裏腹に白石の視線はもう俺を責めていなかった。視線の先はどこか別のところを見ていた。

「でも確かに理屈ではそうよね。フラレました。じゃあ次を探しましょう。そして、何年か経って学生じゃなくなって、狭くて窮屈な学校生活じゃなくて、誤解と偏見に満ちているけど今よりは広々とした社会で同性愛者であることを認めてくれる女の子を好きになって、あの加奈の元気な声も明るい顔も人懐っこいところも、こんな意地悪なところも、加奈の何もかもが懐かしく思える日が来るから、早くそうなればいいってね。……そんなの何万回も自分に言い聞かせた！でもそんなふうに思えない！だからこうやってバカなことするために、ここに来たの！……私は私自身を偽れる人間じゃない。学校で周りに合わせて、必要以上に自分偽って、でも勘違いだったけど本当の自分をさらけ出せる子に会ったと思った。すぐにそんな割り切れるワケないじゃない……」

俺は無地の白いハンカチをポケットから取り出し、白石に渡した。

白石の白い頬に伝う涙が見ていられなかったから。
俺にハンカチを渡され、白石は自分が泣いている事に気づいたようにメガネを取り、涙を拭きながら泣き崩れた。

白石の語る宮坂加奈は俺の知っている宮坂じゃない。そんなに明るくもなければ、人懐っこくもない。ましてや人の心の奥底を照らすことなんてできないだろう。それは彼女が仮面と言っていた部分だ。それをただ遠くから見ているだけだった白石が勘違いし、理想化しているだけにすぎない。付き合ったとしても失望するのは白石の方だろう。だったら尚のこと今、ここで別れた方がいいに決まっている。
けれど俺の口からは「悪かった。ごめんな」という言葉が出てきた。
俺が言ってもどうなるものじゃない。
本当は宮坂が面と向かって言うべきことだと思う。
けれど俺はこう言うしかなかった。

泣き崩れた女とその向かいにいる学生服の男。
周りからはどう見えるのだろう。
恋人か友人か姉弟か、もしくは兄妹か。
人の目なんてそんなものだ。
本当は女性同性愛者（レズビアン）と死体愛好者（ネクロフィリア）。

泣き終わると会計を済ませた。お金は全て白石が払った。
もちろん、俺も出そうとしたが強引に「こういう時のためにバイトをしているんだからさ。借りは作りたくないし」と白石が払い、外に出ると俺にカプリを渡した。

「俺は吸わないよ」
「吸いなよ。雨宮、ストレス溜まっている顔してる。私以上に何をやるか分かったもんじゃないから」

冗談めかして俺にカプリをくれた。
俺はその手にやたら馴染む大きさ箱をどうしたらいいものかと手で玩んでいたが、「じゃあ、ペニスを喰い千切らないようにもらっとく」と言って、結局、学ランの内ポケットに入れた。

「じゃあ」とお互い手を上げて、駅で別れた。俺は白石が雑踏の中へと消えていくのを眺めながら、頭の中でまとまらない何かがぐるぐると回っていた。多種多様な人々を狭いところに押し込めてゆっくり回る巨大な観覧車のように。

その観覧車の中には白石の姿があり、三雲の姿があり、カラスの死体が転がっていた。
そしてクラスの連中や先生、両親の姿もあった。
ただ宮坂加奈の姿だけはなかった。

○

翌日、白石は登校してこなかった。
担任は「白石は風邪で休むそうだ。流行っているからお前らも気をつけろよ」と言っていたが、俺は失恋のショックで休んでいるのかと思った。

けれど何日経っても登校してくる気配がなかった。
そして一週間経ったある日、担任が「実は一週間前から白石香織が行方不明になっている。警察も調べているが、お前達も何か知っていたら俺に言うように」と険しい顔で言った。

クラスでその噂で持ちきりになった。

誰もがその話題を口にした。けれど数日でいつも通りに戻っていった。
白石がいない。という事実をすぐに受け入れたのだ。たまに心配するヤツもいたが、ごくたまにだ。
別にいてもいなくても日常生活では何ら困らない。これが事故に巻き込まれて怪我をしたというなら病院に皆でお見舞いでも行ったかもしれない。そして死んだとなれば皆同情しただろう。泣くヤツもいたかもしれない。けれどそのどちらでもない行方不明だ。ただ日常生活に嫌気が差して家出してどこかでなんとかやっているかもしれない。そうも思える余裕がどこかあった。

本当にいなくなった理由を知っているのは俺と宮坂だ。
いや、もしかしたら別の理由かもしれない。
だがいなくなった日を考えれば、俺達がいなくなった理由に違いない。

俺はもう休憩時間に宮坂と話さなくなった。俺は空いた時間は男子生徒と話すようになったし、宮坂の方も俺を避けるようになった。お互い、一緒にいると白石のことを思い出し、気まずくなるからだ。

休憩時間にふと白石の仲間達の方を見た。
白石と一番近い連中だったが、もう陽気さを取り戻していた。そしてあんなに暗かった岩淵が楽しそうに仲間と話している。内履きもいつの間にか新品に換わっていた。

そうやって十日が経った。
俺は白石の事を考えない日はなかった。
どこでどうしているのか？
一つの仮説を立てた。それが一番しっくりとくるから。けれどその事をできるだけ考えないようにしていた。頭の中の隅に追いやって

忘却するのをひたすら待っていた。しかし、同時にそれは白石と会うまで消えないものだと分かっていた。

「スゲーじゃん」

三雲がキャンバス描かれているカラスの死体を見て言った。

隣で描いている三雲のカラスの死体より上手く描けている。

三雲のは上手くは描けてはいるが、ただのカラスの死体だ。俺のカラスの死体はさらに一歩進み、死と完全に向かい合っていた。

三雲を実力で見下してやろうと思っていた。しかし、実力で勝ったにも関わらず、なんの感情も湧き上がってこなかった。

「キミ、なんでこんなに上手くなったん？」

「カラスの死体と話したから」

「へぇ、スゲー、超能力？そりゃ勝てんワケですね。カラス、なんて言ってた？」

三雲は何の感情も込めず、先生に言われて仕方なしに国語の教科書を読む生徒のような口調で言った。

「あのカラスは自分で自分を殺した」

「へぇ、自殺？」

「そう、自殺だ。個人的な理由があって、死が必要だった。納得して死んだ。けれど突拍子もなく自殺したことに対して仲間は驚いた。本人の内面を知っていればあるいは納得したかもしれない。けれど仲間はそいつの外面しか見てなかった。でもカラスは内面のことを話す気はなかった。話せば理解されないことが分かっていたから。だから話さなかった。もっとも話したところで他人の内面なんて誰も完全に知ることはできない。自分自身でもよく分からないものだから。つまりカラスは死ぬべくして死に、仲間は驚くべくして驚いた。カラスは満足だった分からない。ただ死ぬことによって絶望からほんの少し離れることができた。世界はそれを赦(ゆる)した。カラスを

忘却することによっての赦しだ。世界はそうできているから」

三雲は黙って俺の言葉の続きを待った。

「現実をありのまま直視することってできるんだろうか？暴力とか腐敗物とか、一切のネガティブから目をそらさずに」

「さぁ」三雲は肩をすくめた。

「それができるかどうか知りたいから描いているんだけどね」

それが絵だけではできないから映画でも撮りたいのだろうか。

なんだか俺は疲れていた。うまく眠れない。寝たらロクでもない夢を見る。そして学校へ行けば、白石は登校してきていない。でもまた日は昇り、沈む。その決まった動きを、きっと呆れるくらい長く続ける。俺が死ぬまで。死んだ後も。

「そういえばさ。お前、妹とやったって言ってたよな」と俺は言った。

一瞬、何を聞かれたか理解できない表情だったが、三雲は思い出したかのように言った。

「ああ、そういえば言ってたね。やったよ、何度も。妄想で。だってボク、一人っ子だし」

俺は白石からもらったカプリを学ランの内ポケットから取り出した。

「吸うんだ。っていうか、それ女向けのじゃね？」三雲の声を無視して火を点ける。

校内でなんの躊躇いもなくタバコを吸う。今、俺は絵に描いたような不良みたいなのだろう。

そして俺はタバコを咥えながら、ペンティングナイフでキャンバスを罰点（バッテン）に切り裂いた。

三雲は驚きのあまり声も出ないようだった。

「失敗したわ。まぁいいや、どうせ駄作だし」

俺はペインティングナイフもパレットも無造作に床に落とし、椅子に深々と腰掛け、呟いた。

「俺、短大行くのやめて、T映画専門学校に行こうかな。そこなら俺の学力でもいけるし。カラスの死体も別の形で完成させられるかもしれない」

俺はその細いタバコをゆっくり深く吸い、タバコの煙を味わいながら三雲の言葉を待った。

～終わり～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9800x/

カラスの死体

2011年11月24日23時59分発行